の特長とも云ふべき、何の諦め、何の覺りもなく、現在の暗黑から暗黑に迷つて苦み狂ふその切實な苦悶の影が、春葉氏の作品に依つて見られないからであらうと思ふ。人物に接して見ても、春葉氏の心には矛盾し撞着し、混亂し動搖したところがない。或る意味から云ふと、苦しくとも、惱ましくとも、縱し其結果はどうであらうとも、苦しむところまで苦しまず、進むところまで進まずして、好い加減なところで諦めや覺りをつけて了ふ春葉氏の性格が、春葉氏の作品の存在を危くするものではあるまいかと、愚かかも知れないが、自分は然う思つた。

書齋を見ても春葉氏の趣味はかなり廣いやうである。その趣味が廣い如く、その性格も深く突つ込んで行く方でなくて、廣く平面に擴がる人らしい。春葉氏は江戸生れと聞いた。由來江戸の人は趣味が廣い、趣味が廣いと同時に心も廣い。何事にも執着と云ふ念が薄い、氣質があつさりとして深くない。之れは一面に於ては長所であると同時に、他面に於ては短所であると思ふ。自分は春葉氏を、何事も淡泊でどこまでも深く突つ込んで行くと云つたやうな、鋭いところの無い人と思つた。之れが春葉氏に依つて享けた第一印象の偽らざる告白である。

片上天弦氏

色の白い、眼の神經質的な、好く言ふと物靜かな、惡く云ふと話をしても何をしても煮え切らぬやうな人である。些つと見は女のやうに靜かである。聲なども細い。話して居つても妙に超然と澄したやうなところがある。初めて會つた時には、餘り口數をきかれない。むつつりと默つて笑ふこともは少ない。それは態度が然う見えるので、心から然う澄した人ではあるまいけれど、縱し、態度だけにしろ、餘り好い感がしない。天弦氏はおとなしい人である。物靜かな人である。が、此

つと會つたゞけでは、只、それだけの人にしか見えない。然し心の中は然うした單純なものではあるまい。矛盾あり、煩悶あり苦痛ある人であらう。それを、その態度に現はさないで、じつと腹の中に秘めて居るのは、ねばり氣が強いからだ。天弦氏には反撥力と云ふものがない。外部から壓へ付けられて、その強い壓迫をひし〳〵と感じながら、それをじつと內部にしめて、決して之れを反撥しない。天弦氏は軟らかく強い人である。消極的に強い人である。おとなしい物靜かな人と見えるのは其故である。心の中は混亂して居る、動搖して居る。それを少しも外部に現はさないのが天弦氏だ。如何な

る煩悶懊惱も、自分の腹の中で必らず所決して了ふ。苦痛を叫び、救を求めてあせる人ではない。天弦氏は自分一人で苦み、自分一人で考へ、自分一人で解決すると云つたやうな傾きの人である。要するに天弦氏の生れながらの性質は哲學者的である。本を讀んで、宇宙や人生のことを考へて暮すに適した性格である。幾冊かの本を持つて六疊の書齋を自が天地として生き得られるのは、天弦氏のやうな性質の人であらう。

三島霜川氏

十年一日の如しと云ふ言葉は文壇に於ける霜川氏にも當て塡まる言葉だ。文壇に霜川氏の名を聞くのも既に久しい。が、其久しい割り合ひに少しも名が揚らない。十年前の霜川氏も十年後の今に於ける霜川氏も、矢張り文壇の同じやうな位置に生きて居る。霜川氏など、一緒に、同じやうに文壇に打つて出て、既に一花パッと咲せて最うすたれかゝつた作家もある。それが、霜川氏には然うした華やかなパッとした時代は未だ來無い。十年前から同じやうな糸をつないで居る。十年前に名を出した霜川氏を、十年後の今文壇の或る一部で注目すべき新進作家と云つたのを自分は記憶し

て居る。成程、名を出して幾年にならうと未だ一度も花を咲かせたことのない霜川氏には之れから盛りの花の時代が來るであらう。その意味に於て霜川氏は新進作家である。氣も若からう。抱負もあらう。然し其名は既に文壇に古い。三島霜川氏は老いたる新進作家である。

斯くの如く十年一日の如く、同じやうな位置に立つて居る霜川氏に、自分が始めてお目にかゝたのは、それは初秋の一日、空の誠に能く晴れて、氣も氣もうら〳〵と長閑に物の響きの能く冴えた日の午後であつた。

其時霜川氏の住居は、今と同じ其の二本榎で、新建ての二

階屋、その二階六疊――北に面した一室が書齋で、自分は其書齋に通された。襟垢の着いて冷たく氣持ちの惡るさうな、べら〳〵した大島紬かなんかの着物を着て、メリヤスの白いシャツが垢で汚れて鼠色になつたのを、前のボタンの外づれたまゝ、身なりなどには少しもかまわぬ、だらし無い風采であつた。色の黑い肌目の荒い人で、長い頭には少し垢が付いて居る。顏は締りのある凛とした方で、きれいの好い目尻にやさしみのある眼は、神經質らしく光つた。口元は屹と締つて打ち見た所は凛々しい男振りだ。聲は喉から出る太い錆のある聲である。人と話しながら、左りの手を親指と四本

の指を兩方に開いて、腮を支へるやうに喉まで撫で下す。そして上瞼を思ふさまに開いて、目を大きくして伏せるのが特に目立つた癖である。

少しも、自分を勿體振つたり、氣取つたりしたところの無い。直ぐ隔てない友人のやうに親み得られる人だ。霜川氏には若い人々の話を聞いて、自分を一歩高い所に超然として置いて、その話を冷笑したり批評したりするやうな厭やな所が無い。どんな人の話でも喜んで聞いて、自分の思ふところも包まず語り、共に研究すると云つた態度だ。自分は直ぐ友人のやうに親むことの出來る。隔てない其氣象も嬉しか

つたが、己れを下つてどんな若い人々の言にも、尙ほ自分の知識を求めると云ふその態度が、少なからず氣に入つた。そして文壇に於ける霜川氏が、輝き無いその生命を葬られもせず尙ほ保つて居ることの出來るのは、美しい此の態度があづかつて原因すると然う思つた。

いろんなことを話して居る中に、動搖極り無い現代の劇しい思想の潮流に、一歩も遲れず平行しようとして煩悶する努力のいら〳〵とした心の樣が能く窺はれる。霜川氏は今、從來の總てを破つて新らしきに入らうと努力して居る人であると思つた。作品に依て見ると、時代に遲れまいとす

る然うした苦悶の影は少しも見られない。悟もせず覺めもせず從來の儘に盲動して居る人の樣に見えるが、會つて話を聞いて見ると、悟つても居る。覺めても居る。覺めて悟つて全然古きから脱しようと努力するが、未だ脱するを得ない人だ。古きを捨て新しきに入らう、囚はれから脱して自由に奔放にならうと努力しながらも、尙ほ古きまゝ囚はれのまゝに生きて居る情け無い人である。失禮な言ひ分であるが、自分は大膽にも言ひ斷る。古きを捨て其囚はれの縛めを破るには今少し眞面目なる修養が必要であらうと思つた。霜川氏は己れの弊と己れの弱點を自覺して居る人だ。自覺し

て新らしきを求めながら、未だその縋るべき確なる新らしき何物も頭に無い。それで、覺めては居るものゝ、縋るべきその歸着する所が定らないので、心で無暗にいらゝしながら、作品の上に於ては依然從來の儘の生活をして居るのだ。

話を聞いて居ると、やはり作品と同じやうに總ての物を一一理屈をつけて考へ無ければ承知出來無いと云つた風だ。頭が全然理屈で出來て居る。霜川氏は渾然として醉ふと云ふことは出來ない人だ。酒に醉ふて騷ぐのも、相愛する男女の愛も理屈を以て解釋し、理屈を以て描かうとする。吾れから進んで渾然として醉ひ、自ら男女の愛を感じて描くこ

とは霜川氏には出來ない。自分は霜川氏に接して、這麽頭の人だからあゐした作品のあるのは尤であると思つた。

霜川氏は理屈の人である。その心には同情もあり。熱もあり。涙もあり、優味もある。然し、その頭が全然理屈で出來上つて居る。霜川氏は此の理屈で出來上つた頭で作品をこしらえる。話をしても理屈の頭で話をする。

自分は霜川に始めて合つて、頭と心とは別々な人だと思つた。そして、作品を拵える時には頭で拵える。人に接するにはその心で接するのだと云ふことを考へた。

作品では感服出來ないが、接しては實に好い人である。

附錄

如何にして文壇の人となりし乎

正宗白鳥

私が文壇の人となつたのは、別に際立つた動機がある譯でもなく、又、特に感じたことがあつてゞもない、要するに極く平凡なもので、文壇の人となるより外仕方がなくてなつたのである。

私は子供の時から讀書が非常に好きで、家にあつた藏書などは大抵讀み盡したものである、先祖には歌讀みが多く殊に祖父が盛んに讀んだものだ。祖父の伯父と云ふのは、文

化文政の頃、六樹園の門弟で、狂歌だの和歌などの自費出版を企て、それが出來ない中に死んだが、其爲め隨分種々な本が集められて、三馬時代の木版本や、大千世界樂屋何とか云ふやうなものもあつた。明治時代の活版物なども大分あつた。自分はそれ等の書物を盛んに讀み、八犬傳と日本外史は十歳ぐらゐの時の愛讀書であつた。

學校に行ぐやうになつてからは、少年園や、民友社の出版物などを讀んで、小說を書いて見たいと思つたこともある。

私の青年時代は熱心なるクリスチャンであつた。文學上の感化と云ふものは別に受けたこともないが、宗敎上の感化は內村鑑三氏、植村正久氏などに依つて受け、殊に內村氏の「キリスト敎徒の慰め」などは、紙の破れるまで繰り返し繰返へし讀んだものである。出京後植村正久氏に依つて洗禮は受けた。

鄕里を出る時にも、同志社にしやうか、早稻田にしやうかと考へたぐらゐである。然し、東京が好くて早稻田の文科に入學することにしたが、まだ宗敎の方をやらうかなどゝ云ふ氣もあつて、一時は小說を讀むのを全く止めたこともある。で、早稻田在學中其圖書館へ入つても、日本の小說などは些つとも讀まず、只、英語を覺える爲めに、スコットとかヂッ

ケンスとかエリオットとか、ヂスレリーなどゝ云ふ充らん英國文學に眼をさらした。それも文學を味ふ爲めではなく、只英語を覺える爲めに讀んだのだから、今に爲つては何等記臆に殘つて居る所はない。ツルゲネエフとかモウパッサンなどは漸く二三年前から讀み初めたものである。

日本の文學は出京する迄に讀んだばかりである。十八の二月に出京して、五月から大病になり、醫者からは死を宣告される。國に歸つたり、又出京したり、全快して後もそれ迄自分の讀んだ所のものは、皆忘れ果てたやうな氣がする。

私の小說を書くのは、初めは好きで書かうと思つたが、之れが自分の天分だとは決して思はない。自分の成すべき天分は他に何かあらうと思つた。が、今になつて見ると、年を取つて之れをやるより外仕方ない。文學に最も天分があると云ふ抱負はないが、實業もやらなければ勞働もやれない。と云つて、今から宗敎家でもない、外に逃げ道がないから仕方なくやつて居るのだ。評論を書くのも、私自身には書く氣はない、初めの考へは文學をやるにしても、詩でも小說でも、創作をやらうと思つた。評論が私に適して居るとは思はないが、境遇上餘儀なく評論の筆も執つて居る。

要するに私が文學をやつて居るのは、やり度い爲めでも

なければ、自信のある爲めでもない。只餘儀なくやつて居るのである。

相馬御風

自分は文學者に成つたのでない。努力して之れから成らうとしつゝある所故、文學者となつた動機と云ふよりも寧ろ文學者に成らうとするやうになつた動機と云つた方が至當である。で、何故に文學者に成らうとしたかと云ふに、別に動機と云ふ程の際立つたことはない、只、幼少の頃より文學と云ふものが好きであつた。何故好きであつたかそれは分らぬ。別に理屈はないのだ。一體自分の母は非常に病身で別段之れと云ふ樂もなく、只、父の餘暇に古い草双紙の話を聞いたり、或は讀んで聞かして貰つたりしてゐた。それを又私が始終聞きつけて居たが、そんな事が動機で小說が非常に好きになつた。けれども、何を云つても自分の鄕里はひどい田舍で、新刊本などは殆んど見ることが出來ない。小學校時代には、都會の子供が少國民や少年世界などを讀むと云ふことを聞いては居るが、そんなものは手に觸れることも出來ず。昔の草双紙や軍記ものなどを讀むに過ぎなかつた。で、新しい小說を讀むやうになつたのは、中學校に入つてからである。中學校は自分の土地絲魚川に無かつたので、十二

離れた高田の中學校に入つて、二年級になるまでは其の親類の家に居つたが、近所に非常に話上手な大工が居つて、雨の夜など其家に遊びに來ては昔の武勇傳や、仇討の話なんかをして呉れた。自分は文學好きな心を辛うじてそんなことで滿足さして居たのである。所が中學三年の時に、其土地で士族中の奇人と言はれて居る老人の家塾へ移つて、其所から學校へ通ふやうになつた。其老人と云ふのは狂的な武士道信者であつたが、又稀に看る歴史通で、史書類を澤山持つて居つた。自分は老人の感化で、其の藏書を熱心に讀み初めた爲め非常な歴史好きになり、將來歴史家として

立たうと迄決心したが、其讀書慾は更に變じて、雜誌屋の前に立つて、雜誌や新刊の小説などを手に取るやうにならしめた。尤も然うなる前に、暫くの間ではあつたが、或る友人の家に、試驗中だけ、試驗準備の爲めに一緒に居たことがある。其友人が非常に小説好きで、其時分弦齋の朝日櫻や、小猫や、飛乘太郎や、涙香の指環などを持つて居たと思ふ。それを一緒に居る間に些い〳〵讀んで少なからず興味を感じて居つた。それで暑中休みには幸ひ其友人は同郷であつたので、面白く感じた小説を借りて讀み耽つた。それ等の事が後で本屋の前に立つて、小説本に引き付けられるやうになつた

原因をなしたのである。無論誰の小說が好きと云ふ譯ではなく、小說でさへあれば手當り次第讀んだ。其爲めには二晩三晩徹夜する位のことは、何でもなかつた。けれども自分で小說を作らうなど、云ふ氣は少しも無く、學校へ行つても作文などの點は餘り好くもなし、却つて幾何とか代數とか歷史などにより多い興味を持つて居た。所が、益々小說に讀み耽つて居る中に、數學や理科などは嫌ひになり、國語漢文作文などが得意のものになつた。それは中學の三年から四年に進む時のことである。

それから暫く後に、學校の敎頭として來た下村千三伎と云ふ學士があつたが、其人は短歌が非常に上手で、地方新聞にも些い〳〵出した。自分は其人の感化で、歌を作ることを覺えた。それが自分の文學をやらうと云ふ決心の初めをなしたのである。歌を作ることを覺えてからと云ふものは、同級の同趣味の友を求めて會などを作り、新聲、文庫、明星など、云ふ新しい文學を鼓吹する雜誌を讀むやうになり、作つた歌をそれ等の雜誌や、田舍新聞などに投書して居た。其頃から又芝居を見ることを覺えて、田舍芝居ではあるが、無上の面白いものとして、興業中殆んど半分以上は見るくらゐな勢ひであつた。そんな風で頭が段々と究想的になつて、學

校の學科などは次第に怠けるやうになり、中學を卒業する頃には、最う全く文學でなければ行き所のない人間になつて了つた。學校時代に一時は政治家にならうと云ふ儚い空思を描いて見たこともあるし、又、歴史家になると云ふ纒つた目的を立てゝ見たこともあつたが、中學卒業當時は、只文學――と云つても文學と云ふものはどんなものか分らず、只文學と云ふ二字にチャームされて、大學の文科へでも入れば、それで大文學者になれるやうな意りで、徒らに文學を志望して居つた。で、父にも願つて兎に角大學の文科に入ることにして、京都第三高等學校文科の入學試驗を受けに行

つた。其京都を選んだと云ふのも甚だ譯のあることで、なんだか京都と云ふ所が當時の空想的な頭には天上の樂園でもあるやうに思はれて、別に京都の高等學校が好いと云ふ考へがあつて行つたのではない。田舍から出たことのない自分の目には、見るもの、聞くものの毎に珍らしく面白く感じて、當時の幼い歌心を唆かした。そして、入學試驗を受けに行つたことなどは、まるで忘れて了ひ。金閣寺だの銀閣寺だの、四條の夕涼みだの、石山だのと、所々の名勝に憧れ廻つて居た。そんな風であつたから、無論入學試驗なんか眼中になく、從つて落第は當前の結果であつた。然し、其結果が分つてか

らも別に失望はせず、尙ほ平氣で遊び歩いて居たが、遂に國へ呼び返された。國へ歸つた後も、不相變歌や新體詩を弄つて樂んで居た。けれども家に居るのが面白くないので、勉强にかこつけて高田へ行き、高田新聞に客員のやうな體裁でいろ〳〵なものを書いて居つた。其中に無暗と東京の文壇が戀しくて、わざ〳〵東京へ出て佐々木信綱、金子薫園なんと云ふ和歌の大家に會ひに行つたこともある。其時に同じ中學に居たことのある友人で、佐々木信綱氏の弟子になつてゐた男が居つて。其男の紹介で、當時の青年歌人の四五人とも交りを結び、それ等を無上の光榮として國へ歸つた。それからと云ふものは、何事も手につかず。東京か京都へ出て思ふさま文學的空氣を浴びて見たい氣がした。翌年の一月父に頼りと願つて、彌張り高等學校入學試驗準備として京都へ行かうとしたけれども、其返事が曖昧であつたので、好い加減にごまかして丁度下村千三伎氏が山口の高等學校へ轉任されるのを機會に、其見送りと云ふやうな體裁で高田から東京に出て、更に東京から京都へ行つた。で、京都に三月まで居つて、京都の新派歌人と交りを結び、愈々當時の星菫熱に浮かされて居た。そして、京都に居る友人など〻色々話し合つた結果、早稲田の文科へ入らうと云ふ志望を起し

て、其三月東京へ歸つて同校へ入學した。そして京都の友人から紹介されて、上京早々新詩社へ入社した。それで文學的生涯に入る端緒を作つたのである。

顧みると、自分が文學に志したと云ふには、何等の根抵もなく、只最う好きであつたと云ふより外言ひやうがない。其文學の好きだと云ふことが原因となつて、だん〳〵頭が變つて、遂には何うしてもそれへ出なければ、世の中が渡れない人間になつて了つた。之れは無論自分の性質が感情的であつたと云ふことが原因をなしてゐるだらうが、一つは中學時代の心の楫の取りやうが、斯う云ふ運命にしたのだと思ふ。

斯う云ふことはもつと大家になつてをら申上ぐべき事で、今洩らすのは少々惜しいやうにも思へるが、折角ですから極く手短かに、然うして差支へのない所だけを申上げませう。

僕は、中學を卒業するまでと云ふものは、文學者にならうなどゝは一向考へて居なかつた。政治家にならうと思つて馬場辰猪氏を崇拜したり、グラッドストン、ヂスレリーの肖像を壁へ掛けたりして居たこともある。

演說の稽古も折々やつた。

それから新聞記者にならうとも思つた。僕は元來理屈ッぽいものが好きで、數學の先生などに特別に可愛がられ、數學を專問にやらうなぞと考へたこともある。それに早くから生嚙りに國民の友や、世界の日本や、獨立雜誌なんどを讀んで居た影響もあらう。一般思想上の大偉人にならうなぞと云ふ考もあつた。元來が氣ばかり多くて、之れと云ふ特殊の技量の無い人間であるからして、中學を卒業した時なども、唯、高等學校から大學へ行かうと云ふだけの方針は定めたけれ共、さて、何をやつたら好いかに就ては、容易に決定し

得なかつた。願書差出しの期日が差し迫るまで、尙ほ法科文科理科の三方に迷うて居た。さうして最後に文科を選び、文科も特に哲學科を選むことになつたが、それは何う云ふ譯なのか自分にも分らない。僕は今でも、法科へ行けば少くとも可なりの法律家になつたであらうし。理科へ行けば又相應の理學者になり得たと信じて疑はぬ。

僕は元來小說とか雜誌とか云ふものを好きで、能く讀んでは居たけれども、文學を以て身を立てやうとは、高等學校へ入つた後も、未だ考へなかつたのである。

藤村操は僕と同じ科の次のクラスであつたさうな。其藤

村操が華嚴の瀧へ飛び込むより一二年乃至、三年前に、僕の思想は大變動を來した。其時は性格まで變つたかと思つた。

それからである。僕が單なる學者を以て終始しやうと云ふ希望を拋つたのは。

固より今日猶ほ文壇の人であるとは言へないが、然し、少なくとも文壇の一隅に席を持つ人間になりたいとは思つて居る。けれど今でも彌張り單なる文壇の人としてのみ終り度くは無い。まだ〳〵氣が多い。

婉曲に云ふのは面倒くさいから、打ちまけて云つて了ふが、僕は中々自信のある人間だ。目下の所中心の興味が文學に指配されて居るとは云ふものゝ、僕の天分其物は文學以外の活動にも案外間に會ふものかも知れない。少なくとも哲學と科學とに僕の興味を集中することが出來たなら、這麼團栗の背比べのやうな文士連の間に立つて、けちな光明を爭ふよりか、其方面に努力した方が今少し努力の仕甲斐があるかも知れない。言ひ換へればより多く不朽に近い事業が成し得られるのかも知れない。然し、這麼ことを云ふ所を以て見れば、僕は所詮文壇の人で無いのかも知れない。

無ければそれで好い。

▲始めは軍人志願

小山内薫

十歳の時非常な熱病を患つて、既に生命が危いと云ふ目に逢つた。恰度二月の十一日――紀元節から四月の初めまで褥に就て居た。其間殆んど飯を食はず、お粥の重湯や、飴を飲んで、人の飯を食ふのを見ては羨ましがつて、子供としては誠に淋しい生活をした。其時、母の弟――私に取つては叔父が活版屋に關係して居たが、私の病床を慰めて呉れる爲めに、能く色々な本を買つて來て呉れたものである。其當時の本は折本になつて居た、叔父は歸る時に屹度土産に買つて來る。其時から、自分の好きなものゝ中でも、本が一番好きなものになつた。

其中、然うした折本の繪にも飽いたと云ふので、小國民など買つて來て呉れた。それから次第に雜誌を讀むと云ふことに興味を覺え、其當時の小供としては、多く讀んだ。毎月小國民、少年園、少年世界など取寄せて、月末になつて母に叱られるのは、雜誌を餘り讀む爲めであつた。そんな具合で中學校に入るまで續いた。其時分は文學界、しがらみ草紙など分らないながら、讀まないと何か氣が濟まぬやうな氣がして讀んだものだ。

小說では弦齋、水蔭などのものを讀んだ。紅葉の作物も買つた。今私の所にある紅葉の書物は、初版の多いのを以ても分る。

中學校に入つてからも、本が唯好きだと云ふことで五年まで來た。自分が文學者にならうと云ふ氣はない。それは自分の天分を危ぶんだ爲めでもなく、又、なれないからと思つたのでもない。文學者にならうと云ふ氣が更になかつたのである。

父は陸軍に關係した人で、早く死んだ。母が其陸軍の扶助料で子供を敎育し、一家の生活を支へて居るのを見て、其恩に感じ。何か知ら天子樣に恩報じをしなければならぬ氣がして、それで軍人になりたいと志願した。誰でも少年の時代に有勝ちな、美しい軍服が着度くてとか、勳章が欲しくてと云ふ空想からではない。其恩を浸み〴〵感じて、恩返しをしたい爲めに軍人を志望したのである。

で。中學の二年の時幼年學校の試驗を受けた。體格試驗では合格したれ共、學術試驗で失敗した。それで又翌年も受けけたが、今度は見事に體格試驗で不合格となつた。自分では非常に殘念であつたが、從兄が、君のやうな身體の弱い人間が軍人を志願しても到底駄目だから、思ひ止まつたら好い

だらうと切に忠告されて遂々軍人志望は止めて了つた。

▲鶯亭金升の門に入る

それから、中學の五年までは夢中で暮したが、其間に一つ滑稽なことがある。

私は一體子供の時から本も滑稽物が好きで、近松や西鶴は餘程遲れて讀んだ。一九だの、三馬だの、京傳などの滑稽物を喜び、活版になつて居るだけは大抵讀んで居る、それで、軍人志望を止めて五年になるまでは、未だ十六七の少年の身でありながら、厭やに江戸ッ子がッた。床屋だの、呉服屋の番頭だのゝやうに身を落して、一口噺、川柳、月並、ものはづけなど盛んに書いて、それを例の圍々珍聞へ投書した。其頃私の家は富士見町だッたので、雅號を富士見小僧と署名した。投書だから初めは中々載せられないが、二三載せられるやうになると面白くて堪らず、毎號〳〵投書したものである。

果ては其當時私の崇拜して居た鶯亭金升を訪ね、其門下生となり、富士見町に居るので「白扇倒に映る東海の天」とか云ふ所から、東亭扇升の號を貰つた。

鶯亭金升の門下生となるまでは、外の卑しい文學は色々遣つたが、情歌だけには手を付けなかつた。戀とか、夫婦とか云ふ關係が分らなかつた故爲でもある。それが其所に出入

するやうになつてからと云ふもの、分らない頭で情歌など、も讀んだものである。

之れは今日私の文壇の人となつたに就ては、何の關係もない事のやうであるが、然し、同じ私一個のやつて來たことであるから、筋道として滿更關係のないことではない。何時か文庫の六號活字に、小山内薫と云ふ人は、團珍の投書家であつたが、帝國大學の教育と云ふものは、斯うも人を作り變へるものかと云ふことが書いてあつたが、私が團珍の投書家から、斯う云ふ傾向に進んで來たのは、何も帝國大學の教育に作り變へられたのではない。自分自身に感ずる所があつて斯う云ふ風になつて來たのである。それは、後で分る。

私が中學校に入つて、學科の中の最も興味を持つたのは數學である。それは小學校時代からも好きであつたが。中學校に入つてからは、一層強く興味を感じて來た。次ぎに好んだ學科は、動物、植物、物理、化學などである。殊に植物は友人に好きな者があつてそれに感化され、廣島まで旅行するのにわざ〳〵胴亂を下げて行つたことすらある。一方で然うした學科に興味を持つと同時に、一方には彌張り本が好きで、熱心に本を讀んで文學を思つた。で、中學校を卒業して高等學校の入學試驗を受ける時、理科に入らうか、文科にしやう

かと二途に迷つたが、其時私の同じクラスの友で、文科の試驗を受ける者が一人あつた。其友人に、僕一人文科の試驗を受けるのは淋しいから、是非君も文科を受け給へと誘はれて、遂々文科の試驗を受けることにした。

文科の試驗を受けると云ふことが定つてからは、文科に入るより、早稲田に入つた方が、自分の求めて居る所のものが以上に求められるやうな氣がして、早稲田に入りたいと志が動いたが、母が帝國大學でなければと云ふので、仕方なく寧ろ落第した方が好いぐらゐの考へで、碌に勉强もせず好い加減な試驗を受けた。所が案外にも及第して高等學校の文科へ入學することになつた。

高等學校に入つた一年の間は、時々鶯亭金升の運座などへ出かけ、本郷から元數寄屋町まで歩いて通ひ、運座だから夜十二時ごろ濟む。それからテク〳〵本郷まで歸ると夜の二時――時刻は切れて居るので門は閉つて居る。已むなく塀を乘り越して寄宿舍の中に入り、友人なぞに、何か不名譽な所に出懸けるのではないかと疑はれたものだ。

▲革命の動機は戀

高等學校の一年から二年になる時の夏、私が、私自身を省みて、吾が今迄の生涯にないやうな革命が自分の內部に起

つたことに氣づいた。

其革命の動機は戀である。今其戀を茲に詳しく云ふ必要はないから言はぬが、戀は青年時代には誰にでもある。考へて見れば平凡なものだが、それが元で、眞面目に世の中を見、其眞面目に世の中を見た所を書くのが文學で、今迄自分の文學と思つて弄んで居た物は、道樂であるに過ぎん。恰度落語家が客の品物を集めてそれに依つて落語を作るが如きものである。それを自分は今迄文學と思つて居たのであると云ふことを自覺して、それまで讀んで居た本は皆賣り拂つて、讀まなかつた本を新らしい心を以て讀み初めた。其時

分重に讀んだのはイギリスの詩人で、バイロン、シェレイ、キーツなどである。

それでも、未だ高等學校に於て、少い時から持つて居た席次の競爭をした。けれ共、一方に非常な打擊を受けた其痛手を救つて呉れた宗教の方面の考へから、席次を爭ふのは單に競爭に過ぎん。研究ではないと云ふやうな氣がして、學校の出席も怠けるやうになつた。併し、本だけは熱心に讀んだ。

斯う云ふ次第で、學校に於ける私は殆んど生けるか死せるか分らず、不成績を以て高等學校を出た。

大學一年の時麹町を去り、巣鴨に移つた。其時、今迄些つと

も知らなかつた一家生活の苦しみが自分の身に一度に振りかゝつて來た。父が死んでから二十年、家族が居喰ひをして、子供の敎育までして來たのだから、今少し早く困る筈であつたのだが、それが親の慈悲や親族の同情で、少しも知らずに來たのである。

今迄自分の目を覆うて居た黑い幕が引かれて、一家の貧を直視しなければならぬのである。自分は殆んど破産したやうな氣がした。

▲第二の革命は生活

同時に第二の革命は私の胸に嵐のやうに起つた。それまでは戀とか愛とか、女と鬪ふのが人生だと思つて居たのが、今迄卑めた居た金錢と鬪はねばならぬ。そして、優美に見えた女との鬪ひよりは、卑しい金の爲めの鬪ひが、遙かに眞面目でもあり、男らしい鬪であると自覺した。

恰度、太陽の前に電氣を置いた如く、一方は光りを失つて赤熱が目の前に起つた。然うして、其所で文學と職業とを一つにして見るやうになつた。

充り、初めは文學を全然眞面目に見なかつた。それが第一の革命で文學と云ふ仕事を眞面目に見るやうになり、第二の革命では、文學と飯を食ふことを一つにしなければなら

ぬやうに感じて來た。

私一個としては、自分の事情から感じて來たのだが、西洋の文豪の傳記など見ても、天職と飯を食ふことを一つにして行くのは、決して恥でないと云ふことを知つた。

それから書いて金を得た。得る爲めには今考へて見ても冷汗の出るやうな仕事もして居る。

大學へ入つてからは殆んど出席しなかつた。家に居て生活の爲めに働き、一方では學校より當てがはれた本を讀むに堪へないで、自分の好きな本を讀んで居た。其結果二年になる時には落第した。之れが自分の幼稚園より以來の落第である。後二年は及第したが、それとて唯試驗の時に行くばかり、筆記もない。試驗前に人から借りて寫したり、甚しいのは試驗場に行つてから、人の筆記を見て歩いて、苦しい試驗を受けたこともある。

故に、私の學校生活と、私が文壇の人と爲つたに就ては、殆んど關係がないと云つても好い。唯亡くなられたラフカヂオ、ヘルム先生の感化を受けたことは、確かである。先生の教授を受けたのは一年だが、其感化は深かつた。先生と言へば夏目漱石先生にも二年教はつたが、初めの一年は何の利益も受けなかつたが、先生獨特のシェクスピーヤの講義と、イギ

リスの十八世紀文學史を敎へられて、近世學の研究的精神を鼓吹された。

▲芝居との關係

話は違ふかも知らないが、私は芝居を能く見た。母が江戸ッ子で、其通有である芝居好きの所から、子供の時分既に團菊の芝居を初め、川上音次郎の芝居まで、母に連れられて見たそれが、高等學校に入つてから、あゝした氣風に浸み、其三年間は見なかつたが、大學の一年になつてから初めの好きが一度に爆發して、其年は總ゆる新舊の芝居を見て歩いた。それから段々と深みへ入つて、遂には大學の學生でありながら、劇場の内部に出入して、脚色、演技法、大道具の相談にまで與かるやうになつた。

大學在學中、僅な費用を出し合つて友人七人で、「七人」と云ふ雜誌を出したが、一年ならずして倒れた。それから、帝國文學に二年關係した。出てからも一年其關係を斷たないで居たが、私自身は校友會の機關雜誌でも引受けた氣で、自分の考へ通りに遣るとか、熱心に奔走することは出來ないで了つた。

大學を出てから、已むを得ずんば英語の敎師になつて飯を食はうと思つたが、私のやうに學校に不忠實であつた人

間に然ういふ口はない。仕方なく文學で飯を食はなければならぬ。依然として劇場に出入して居たが、本當に芝居に雇はれたことはない。行らぬ飜譯したりなぞして生きて居た。所が一昨年の暮になつて、或る劇場に正しく雇はれることになり、其芝居の爲めに多少の努力をしたつもりだが、去年の六月であつたか七月であつたか自ら職を辭して了つた。

私が劇場内の雇人となつて働いたのは僅に半年、だが劇場に出入したのは金ボタン時代からであるから、殆んど三四年にも亘る。併し、私は其三四年の間に忍耐して劇場の中から或るものを得たいと思つた。そして私よりも或物を與へたいと思つた。が、私の得んと欲した所のものは得られず、與へんと欲した所のものは向ふで貰つて呉れず、私は戀の苦痛、生活の苦痛以上の痛みを受けて、殆んど疵だらけのハートを以て劇場を去るやうなことになつた。それを藝術の苦痛とでも云ふのだらう。

それから後は御存知の通り、或る私の最も親しい友人の補助を得て、充らぬ雜誌を出したが、それも未だ自己の足らざる故か、餘り世に益もないと見えて思はしくなく、それ以外の事情の下に休刊して居る。

▲私の將來の目的

私の文壇の人となつた話を、理屈でなく、事實として行らぬことを述べたが、私の目的は、今日の小說、詩歌、彫刻、繪畫、と肩を並べるだけの演劇を起したいことである。或る人は日本にも既にそれ等他の藝術と比肩するに足るの演劇歌舞伎あると云ふ。或る人は近き將來に必ず起ると、劇界の前途を樂觀する。

併し劇界の現在及び將來に望みを囑して安んじて居られるであらうか。成程、歌舞伎は日本で獨特の劇である。然しながら、獨立した劇とは言はれまい。少なくも歌舞伎は音樂の力、舞踏の力を藉りて居る。

油繪と水彩畫の相關せざるが如く、油繪と日本畫と異るが如く、今の歌舞伎と全く異る新興演劇を起したいと云ふのが私の切なる願である。それを起すに就ては脚本も書かなければならず、又、それに附隨した色々の仕事はあるが、茲に眞實日本演劇の現在を悲觀する同志が集つて、然うした新興演劇を起したとしたなら、其要求に應じて隱れたる脚本作家も現はれるであらう。

私は此の私の目的の爲めには、文學者と云ふ特殊の名を失つても遺憾はない。世話人となつても好いから私の望むが如き新興演劇を起したい。

不安な生活の爲めには色々なこともする。劇評を書くのも決して劇評家としての名を成さんが爲めに書くのではない。一面私の思ふ劇と現在の劇を比較して批評し、一面、私の劇に對する立場を明らかにする爲めである。

「如何にして文壇の人となりし乎」と云ふ問に對して、理論的、哲學的、人生觀的にお話しすることは私には出來ない。唯今迄踏み來つた徑路を述べたまでゞある。

水野葉舟

まあ、全くの處はずる〳〵でなつたのですね。

僕は九州で中學を卒業して、東京に來ると、麻布中學の補習科に入つて居ましたが、早稲田の文科に入り度いと思つて、早稲田の高等豫科に入つたのです。その時にはともかくも文學者にならうと言ふ氣で、やつて居たのですが、その中にふつと經濟科の方に入る事にしちやつたのです。それに付いてはくだらぬ野心を起した事もあつたのですが、卒業頃にはそんな事は如何でもよく、會社にでも入つて暮らさうと、その積りになつて居たのです。

それには前から、へボな歌位は作つたのですし、全く文學の方の事を斷念して居たわけでは無かつたので、生活の問題は會社にでも入つて、其で如何にかするとして、その餘力

でもつて文學をやると言ふ樣なつもりで居ました。

處が學校を出ると(私は三十八年の卒業です)丁度その夏は親父が北海道に旅行して居たので、その歸京するのを待つて、方針を極める積りでした。やがて、歸京する。二三の人を訪問して賴めと言はれたので、出懸けて行つたのですが、さう右から左にとは行かなかつた。その中に、親父の九州時代から親しい人で山口俊太郎と言ふ人に、親父が賴んでくれた。一度逢はうと言ふ話だから行けと言はれて、三十軒堀りの氏の店に逢ひに行きました。この人はアメリカで敎育を受けたなか〳〵のエネルギーズムの人で、實に盛んな立派な人だが、一見して僕には失望したらしかつた。

それで支那に行けと言つた。二三年上海にでも行つて支那語を研究して來い。その中に人間ももつときたつて來い。それには毎月食へる位――と言ふから、三四十圓位はやるが如何だと言はれて歸つたが、親父も贊成だつた。それで私も仕方が無い、行かうと思つて、そろ〳〵用意などをして居た。

それが、八月の三十一日に、こんな事が出來た。久しく逢はなかつたし、その支那行きの一件を報告にと思つて、高村碎雨君(光太郎君)を訪れた。

「僕は上海に行くよ」と言ふと、さうか、ぢや君の方が先になつちやつたね(高村君が洋行するといふ事はその頃から決まつて居た)君に送つて貰ふつもりだつたが、僕が送るわけかなどと言つた。その時に、高村君は半年もかゝつて等身の女が溺死して、岩の上に俯向きになつて居る處を、――脳の處を岩で支へられて左の手がぶら下つて、髪の毛がとけて、首がぐつたりよつて居る。――そんな風の處だつた。まだ油土で七分位出來上つて居た。それの置いてあつた仕事部屋で――そこが光太郎君の部屋だ――。その製作は、一寸忘れられない處がある作だつた)その部屋で、一日話し暮らした。

高村君は、その日、此間ミレ傳記がね、と言ふので、こんな事を話してくれた。

ミレがパリに出て、頻りと流行の裸體畫を書いて居た。その中、田舎に居た祖母さんは始終、信仰の厚い、非常にいゝ手紙を寄せてくれて居た。ミレはとにかく、自分の野心に追はれて、一日一日送つて居たが、或る日、町を歩るいて居て、自分の繪の並べてある店の前に立つて居ると、そこに立つて居た青年連が二三人で、フン、又ミレの裸體畫か――と言つたのを耳にした。

それを非常に感じて、ミレは今迄の事をすつかり捨てゝ、田舍に引き込んで、パンをかちりながら、一心に書いた「落穗拾ひ」でも「晩鐘」でも、ミレの傑作と言はれるのは皆この後の生活の中に生れた…と言ふ樣な話だつた。

私はそれを聞きながら、ひとく感じた。二兎を追つて居る——と言ふ感じが胸をついた。それで僕は上海行きを止すと言ふと、あまり突然だから、高村君はまあ考へたまへ、考へたまへと言つて、ひどく心配しながら、歸る時には神田まで駒込の奥から送つてくれた。

今から考へて見ると、全くはそれ迄も、何方(どつち)にし樣かと思ひ〳〵して、たゞ漫然と日を暮して居たのだが、やつぱり文學に執念が殘つて居たのですね。それだと言つても大した執念ではなくつて、上海に行つて、エタイの知れない支那語を習つたり、商品の取り扱ひをするよりか、よかつたのですね。

それでその晩は大に考へたのです。そして親父に持ち出すと、案外「それもよからう」位で、さうなつちまつたのです。

それから、「あら〳〵き」を出すまでは、まだ何を如何し樣と言ふ氣も無かつたのです。原稿は載せてくれる雜誌が無し、(金などは勿論)親の家に居るとは言ふものゝ、さうのら〳〵し

て居るのも困るので、文會社に行つたのです。隨分方々を頼んだのです。皆駄目でした。

その後に「あらゝき」を出した。その時も、私には何も豫期しては居なかつた。これで、文壇の人になれゝばいゝが位の心配でしたが、案外に批評をしてくれる人が多かつたので、私は自分でも不思議だと思つた位です。

その中に遂々、こんな事をして生活する人になつてしまつたのです。全く、その間の心持に、斯うの、あゝのと、狙ひを付けてかゝつたわけでも無く、大に野心を燃やした譯でもありません。全くのずる〳〵ですよ。その中に斯うなつちやたんですね。

まあ、しかし、私などが、この短かい過去を振り返つて、こんな事を話するのは、まだ早すぎますよ。まだ、何だかわかつたものぢやないと言ふ心持がします。

金子薫園

自分が今日歌人として覺束なくも文壇の一隅に席を得たとすれば、それは偏に萩之家先生とわが祖父との賜物で、この先生あり祖父あつて、初めて自分と云ふものゝ存在を明かにし得たのだ。然るに、この二恩人共、今は既に世にない人である。譬しへなく溫かな慈眼を自分に注かれた此二恩

人は、自分の今日あるを豫期せられながら、そを現實にし給ふこと能はずして墳墓に入られた。自分が今日贏ち得た成功――と云つても、それは極めて小やかなものだが。これを二恩人の脚下に献じて、小なる慰を得て戴くことが出來ない一事は、自分の殘念に思ふ所である。

萩之家先生に初めて御目に懸つたのは、明治二十六年の秋のことで、それから亡くなられた三十六年の冬まで滿十ケ年の間、先生は自分を實子の如く愛して下された。多數の門弟子の中で、自分が一番可愛がられたやうな氣がした。先生の歌の詠みぶり、文章のかきやう、それから書風まで、よく生の癖を模ねて、世の中に偉いと云つて、わが先生位偉い人は無いと思つて心醉したのであつた。自分の將來は何うか先生のやうな偉い人になりたいものだと、たゞもうそればかりを思ひゞけて居つた。自分が先生に心醉したのは、單にその作物ばかりでは無かつた。先生の氣品の高い人格が、その作物を通して、言ふに言はれぬ美くしさ貴さ、はた懷かしさを覽えたからである。先生に一度でも逢つた人は誰も言ふ、忘れることの出來ない人だと。自分の如く先生に親炙することの深かつた者は、この感が殊に切なのである。先生が自分の病身なのを心配されたことは、一通りでなかつた。息

を引き取られる少し前までも、心配せられたのは、この一事であつた。病身の子程慈みをかけるのは一般の親心である。先生が自分を觀られたのは、丁度この親心に外ならなかつたのである。自分が比較的好い歌や文章が出來ることがあると、先生の喜びは包み切れないといふ程であつた。「斯う來なけりやならん」といふのが、斯る場合に下された賞讃の辭であつた。先生は門下生に對してどつちかと言へば、放任主義を取られて自由に各自の特色を發揮させたものだ。病身である自分には、殊に此放任主義を取られて、成るべくやかましいことを言はれなかつた。自分は甘やかされて先生の膝下に長じたのである。自分の第一歌集「片われ月」に題せられた先生の文を見たものは、いかばかり先生の親愛を受けたかゞ分る。つまり先生は自分を餘りに甘やかして育て上げられたのだ。もつと自分に鞭韃を加へて下さつたならと先生のお情過ぎた扱ひを怨めしく思ふこともある。先生の亡くなられた年は、自分に取つても不幸な年であつた。秋に祖母を失つて、涙が乾かない間に、その冬又先生にお別れしたのである。お別れした當時は唯ボンヤリとして居つた。夢のやうであつたが、一年經ち二年經つて來ると、孤獨のさびしみが、シミ〴〵と胸に應へて來た。自分は單獨だ。もう頼る

人はないのだと思つた時、自分は斯んな事ではならぬと心づいた。努力すべき秋は來つたのだと自覺した。先生の物故は、ゆくりなくも自分をして、文學的生涯に入らしめんとしたのである。

自分は幼い時、父母の許を離れて、祖父母に養はれたのであるが、祖父母はあらゆる物にかへて、自分を鍾愛した。祖父は馬琴や三馬等の忠實なる讀者で、一方又井上文雄の歌も愛好して居られた。早く歿せられた母なども、其父たる祖父の感化を受けて、國文、和歌をよく讀みもし又作つた。で祖父は自分を何うか一人前の文學者として世に立たせたく思

はれて、奬勵したものだ。汝は文學者殊に歌人として適して居るやうに思はれる。病身な汝のやる事業として、和歌位適當なものはあるまい。和歌の研究に一身を委ねよと、子を觀ると親に如かぬと云ふ心から、和歌は自分の天分であるかの如く信じて、誘導奬勵せられたことは、決して並大抵では無かつた。前言つた通り、祖父は忠實な讀者であつて、批評眼は中々鋭いものが有つた。自分が試みに一首の歌を詠じた時、紙片などへ書いて、それを祖父に見せると、いつも叱言は先づ聲調の上に在つた。詞づかひなど餘り新しいのは、氣に入られなかつた。「歌らしくない」と云ふ批難が定り文句のや

うに自分の歌の上に浴びせかけられるのである。それを初めは反抗もしかねない勢であつたものが、一時間經ち、二時間經つ間に、だん〳〵その歌の缺點が解つて來る。祖父の批評は決して不條理なものでは無いと云ふ事が解つて來る。祖父は、文章や和歌に對して、修養のある人では無かつたが、直覺力が非常に進んで居つて、作物に對する是非の批判は大概間違つて居らなかつたのである。祖父が自分の病身なのを案じられて、一寸感冒を引いた位でも、醫者よ藥よと騷がれた程だから、自分が少し餘分に讀書し作歌でもしたら、それこそ身體に障つてはならぬと云ふ所から、自分はたゞもう甘やかされて育つたのである。斯くて祖父は病歿した。自分の保護者であつた二恩人は、相次いで世を去つたのである。秋風落寞の感は、ヒシ〳〵と自分に追つて來て、自ら奮起せざるを得なくなつて來た。自分の眞實の努力は、今後の發展に見ることが出來よう。

こゝに自分の純なる同胞として、唯一人の妹がある。彼が初期の作歌は自分の第二歌集「小詩國」の附錄に「小紅集」と題して收めてあるが、この頃の作風は、確かに時代に囚はれたもので、彼が眞實に喜ぶ所のものは、景にあらずして情に在る。一昨年の秋以後の新潮記載の作に於て、彼が情の眞實を

伺ふことが出來よう。彼は興が起らなければ、決して歌を作りはしない。一夜數十首を詠ずるかと思へば、一月も二月もケロリとして歌と云ふものは念頭を去つた如くである。彼は歌に對して聊かの野心が無い、自分に見せて、とかくの批評を聽くのを何より喜んで居る。彼の歌には、師匠と云ふものが無い。彼は自から刻苦して今日あることを得たのだ。彼は自分の總てに對して、謙讓を失つたことはないが、唯一つ歌に於いては、別人のやうに嚴肅て、忌憚なく自己のおもはくを吐露するのが常である。涙を流して自分の作を喜んで呉れる事は少なくて、苦言を呈して呉れる場合が多い。自分は、この飾らぬ評語を聽いて、尠からず作歌に對する慰藉を得て居るのだ。孤獨の感がヒシ〳〵と胸に應へて來た時、この力ある慰藉を思へば、心そゞろに裕かなるを禁じ得ないのである。

眞山青果

僕も、他の人々と同じやうに、別に文壇の人とならうと云ふ見當をつけて、文壇の人となつた譯ではない。唯、づる〳〵になつて來たのである。

一體、僕は極端な怠け者で、小さい時から總べて規則的なことが嫌ひであつた。從つて、毎日通つて、何時に始まり、授業

時間が何十分、放課時間が何十分と云ふやうな、總べて規則に服從しなければならぬ學校が嫌ひであつた。生れながらにして、性質が既に不規則に出來て居るのであるから、何でも不規則に出來ることが好きであつた。其上、僕のキャラクタアは、異を樹てることが好きなものだから、人と同じ型の中に入つて、同じことをすることが嫌ひで、學校に居ても、同じクラスの生徒と共に、同じく總べてのことに服さなければならぬと云ふのは、實に苦痛であつた。で、考へて見ると、僕の文壇の人となつたのは、性質の上から云ふならば、此の不規則を好むと云ふことゝ、異を樹てることの好きなことが

其原因であらうと思ふ、

それから小さい時から、芝居を見ることゝ、貸本を讀むことゝが非常に好きであつたので、芝居のある毎に必ず見物に行き、貸本を借りて來ては、それに讀み耽つて居た。併し、其當時には、自分が小說を書くやうになれるとも思はなかつたし、又、小說を書かうなどゝ云ふ考へもなかつた。只、面白いので――興味の爲めに讀んだまでゞある。

實際、小說を書かうと決心したのは、醫者になれないと定つた二十五歳の時である。腕白で、怠け者なので、無論鄕黨には信用がなし、學校は退學せねばならぬやうになる。父の死

後、家は貧家になり、仙臺を食ひ詰めて了つて、何うにも仕方なく當惑して居る所へ、其頃東京に居た草野柴二君が、暑中休暇で、丁度歸つて來て、僕に小説家になれと云ふ。尤もそれ迄にも草野君に度々勸められたが、何分自分に小説が書けると云ふ自信もないので、其儘にして置いたのであるが、其時は前にも云つたやうな窮した場合なので、小説家になれるとは思はないが、其勸めに從つて漫然出京した。で、一面から云ふと僕の今日あるは、草野君に負ふ所大なりと云ひ得られる。

僕は、總ての點に於て、極めて晩成の方で、二十五歳の其年書いた小説を、今出して見ると、其幼稚なことは實に話にもならぬくらゐである。それでも、充らぬ田舍新聞へ出す爲めに、こつ〳〵と毎日下らぬことを書いては、それを一々丁寧に淨寫なぞしたものである。今でも忘れることが出來ぬが、其頃文藝倶樂部の懸賞小説へ、二度ばかり投書したことがある。賞は取れなかつたけれ共、批評だけは載せられた。其文句は忘れたが、意味は

「此の作者には多少の才氣ありと認む。泉斜汀氏に私淑せる風あるを見る。今少しく修養して、東京のことに通じなければ可けぬ」

と云ふやうなものであつた。それと云ふのは、僕は其頃仙臺から漸く出て來たばかりなので、百姓辯が拔けず、假名遣ひの誤謬なぞが大變多かつた爲めである。それでも僕は、石橋思案氏(?)の批評を非常に恩惠に感じて居たものである。

出京することはしても、別に學資の來る所もなければ、少しの收入もないので、其當時は、雜司ヶ谷の友人の家へ食客同然の悲慘な放浪をして、次ぎに佐藤紅綠氏の家へ寄食した。

當時、新潮社の佐藤橘香氏が紅綠氏と懇意であつたので、何か紅綠氏が新潮に書く約束をした。所が其れが期日になつて出來ぬので催促に來られたで、其間に合せに、僕の留守の時、僕の書いた「かたばみ」と云ふ小說を、僕の机の抽斗から出して、其時分には未だ名も何もない時なので、姓は書かず、只、靑果と署名して雜誌へ出した。

一つにはそれが緣となつて、僕は文壇の人となつたのである。と、云ふのは、その後或る時橘香氏が、小栗風葉先生を訪ねると、先生は丁度其時、僕の書いた「かたばみ」の載つた新潮の着いた時かなんかで、見て居られたが、同氏に向つて、此の小說の作者はどんな人間であるとか、何うして居るのかなどゝ云ふことを聞いて、兎に角、將來見込みがあるから目を

かけるやうに、時々は遊びに來るやうになどゝ言はれたので、それから橘香氏も僕を引き立てゝ、種々な面倒を見て呉れ、其中には同氏の紹介で風葉先生の家へも出入するやうになつて、今日に至つたのである。

で、僕の文壇の人間となつたのは、充りは其性質からであることは云ふまでもないが。之れと云ふ動機もなければ、革命もなく、ずる〳〵の中に斯うなつて了つたのである。

吉江孤雁

私は未だ文壇の人ではありません。併し何う云ふ形式を取つても可いから、藝術の爲めに盡して見たいと云ふ考へは持つて居ります。必らずしも小説でなければならぬとも思はないし、評論でなければならぬとも思ひませんと云ふのは、何も出來る自信がないから、然う云ふことになつて居るのでもありませうが。兎に角、何う云ふ形式に於ても、藝術の爲めに吾が短かき此の一生を盡すと云ふ決心をして居るのです。何う云ふ形式を取つても可いとは云ふものゝ、小説を書く時には、少なくも眞實なるライフの一部分を止めて行きたい。形を寓して行きたい考へでありますそれで、私などは未だ文壇の人と云ふことは出來ないのは勿論であ

りますから、如何にして文壇の人となつたかと云ふ問ひに對しては、些つと答へ兼ねますが、何故吾が短かき一生を藝術の爲めに盡さうと決心し、今迄、然う云ふ考へを持ち續けて來て、尙ほ之れからも此の決心を曲げずに行かうと思ふやうになつたか、それから今迄の、私の短い道行き丈けを話して見ませう。

で、私が何故藝術の爲めに一生を捧げると云ふやうな心持になつたかと云ふと、それは今からずつと前、十年も、もつと前のことであります。中澤臨川君と一緒に、故郷の中學校に居た時代、中澤君から始終文藝の趣味を鼓吹されて、未だ

十五六才の空想の盛んな夢想的な頭へ持つて來て、其頃民友社から出る雜誌だとか、十二文豪のやうなものから、國民の友だとか家庭雜誌などを勸められるまゝに耽讀したものであります。で其中には自分でも次第に文藝的の趣味が中心から湧いて來る。益々あらゆる書物を讀み耽るやうになりました。

其中偶と家庭雜誌の中に、誰れの書いたものか分らないが「吾が土曜日の夕」と云ふ文章が載つて居たのを見て、何の氣なしにそれを讀で見ました。其文章の筋は、土曜日の夕方書齋に籠つて居て、窓から見える山を見ると、山には淡く夕

霧がかゝつて、其山の向ふは日向灘である。で、其山を見ながら空想に耽つて居ると、鷗外氏の譯された「うきよの波」の中の人間のことなどが頻りに胸に浮んで來て、別れて今は何處に居るか分らない友人のことを懷ふと云ふのであります。

した。それが、何とも言へず私の胸に染々と觸れて、自分も、何は措いても小說とか、文章とかが作つて見度くて堪らなくなつて來たのです。所で、其當時私にそれ丈け深い感銘を與へた其文章が、偶然にも國木田獨歩さんの書かれたものであることを遂ひ近頃知つて、急に昔を想つて懷しくなり。今日は靑山に墓詣をして來ました。それが匿名であつたので今迄知ることが出來なかつたのです。

自然さうして色々な文學的書物に讀み耽つて居る中に、中學校を卒業したが、自分の都合から二三年遊んで居た。其間も中澤君からは、絶えず文藝の趣味を鼓吹されて居ました。其中東京へ出て來て、遂に早稻田へ入ることになりましたが、其頃偶然窪田空穗君と同じ下宿に居て、其處へ水野葉舟君も時々訪ねて來られたりなどして、其時代、窪田君から一層適切に文藝趣味を鼓吹されて、自分も創作を遣つて見たいと云ふ念が愈々固くなつて來ましたけれ共、私にはどうも土臺物を考へることの方が多くて、それを實際に現は

して行くと云ふことが至つて無器用でありますから、とても作と名のつけられるやうなものが出來さうに思はれなかつたのでもあるし、今でも思つては居ませんで、兎に角、出來る丈け努力して遣るより外仕方ないと決心しました。

其中、矢張り中澤君が薦めて――、國木田さんの近事畫報社へ行くやうになつて、國木田さんに會つてからは、暇ある毎には、必らず文藝上の色々な話を聞いたり、一緒に散歩などして、國木田さんの日常の行動を見て居る中に、何うしても眞の人間としての活動を遣つて、それに依つて本當のライフに觸れ、それを具體的に描いて行くのが、せめて吾々の此の短かい生涯に於て成して行くことの中の、最も意義の深いことのやうに感じて來たのです。

其當時國木田さんから與へられた教訓感化は、恰度中澤君から與へられた所と同じとで、また一層痛切な所がありましたが、中澤君と國木田さんとは、餘程能く似た、共通の點の多い性格でありましたから、二人の感化は殆んど同じやうに私は受けたのでありますが、國木田さんは、兎に角私に心を据ゑて置く可き場所を明らかに教へて下さつたやうに感じます。と云ふのは、何う云ふ苦痛なことがあらうとも、どんな困難なことがあらうとも、其中に居て人生のツルー

スを味ひ、それを知つて、そして解釋することが出來さへすれば、吾々は非常に幸福ではないか、だから心を單純に持つて、謙遜な、そして非常に靜かな心持ちで、總ゆる物に向つて居さへすれば、總べての現象が、能く胸に映つて來て、その意義を解釋することが出來る。で、それを其儘に描き出し、寫しさへすれば、旋て作物になる可きものである。それで、君の作は(私に向つて)混亂して居る姿があつて可けない。それを今少し單純になるやうに心掛けねばならぬ。然うすれば屹度可い作物が出來るに違ゐない。と云ふことを能く敎へられました。其の他色々なことを諄々として敎へられて、どうやら自分にも作をする態度が幾らか分つて來たので、出來ても出來なくても、遣ふ丈け遣つて見たいと云ふ心持になつたのです。

で、何時でも藝術的にばかり物を見ると云ふのではなくて、眞の人生と云ふもの丶爲めに存在して居る人生であるからして、單に文學者と云ふものでなくても、藝術の爲めに盡すことは出來ると云ふやうに思つて來ました。それで、作をする態度と云ふやうなものは分つて來たもの丶、何をするのが、自分に一番適して居るのかと云ふことは自分には分らないことで、言ひ換へて見れば、實際の文壇の人丶なる

ことが出來るか何うかと云ふことは分らないのであるが、兎に角、藝術の爲めには、何う云ふ機會に於ても力を盡すことが出來れば、それで私は幸福だと思つて居ります。

で、私に感化を及ぼして呉れた先輩友人のことを思つても出來る丈け努力して、遣り度いと思つて居るのであります。

すから、若し此の努力の結果成れゝば、之れから先が文壇の人となりたいのであります。

如何にして文壇の人となりし乎と云ふ題でお尋ねです

徳田秋江

が、私は未だ之れから如何にして文壇の人とでもならうかと云ふ思案中で、文壇の人となつて居るのか、居ないのか、分りません。這麼ことを云ふと長谷川二葉亭さんを眞似て氣取るやうに見えるかも知れませんが、私は初めから文學は好きでありましたが、文學者となつて一生を送るのが、何となく物足りないやうな氣がしまして、本當に文學者にならうと思つたことは未だありません。今はそれを意識的に考へますが、一體私は幼い時分から、何を遣つても物足りないやうな氣がしまして、何事にも眞實の力を盡すことの出來ない性分がありました。早稲田を出ましてから、生活の爲め

に餘儀なく理詰めに文筆に携はつたのが、次第に年を取るに從つて外に逃げ道はなくなるし、仕方なく、まあ斯うしてずる〳〵と文學者のやうなものになつて了つたのです。それで、時々は「あゝ自分もいよ〳〵文學で遣つて行かなければならんのかなあ」と憤々と思ふことがあります。

能く、年を取ると志が固ると云ひますが、自分の身に引き比べて其言葉を考へて見ますと、充り、無理往生に自然と然うなるのですね。と云ひますのは、私なぞ元から文學を好いて居ながら、二十歳前後迄は、はッきり之れを遣らうと云ふ目的も別になく、方々の學校の規則書や、東京遊學案内のやうなものを始終出して見ては、何を遣つたら可いかと思ひ迷つて、まあ之れを遣つて見て可けなかつたら、又外のことを遣れば可い。まだ年が是れだけだから、面白くなければ外のことでも遣れると云ふやうなことを考へまして、或る思ひ決めた一事に全力を打込むことが何うしても出來ませんでした。で、早稲田を卒業しますまで、それは色々な學校へ入つて見ましたが、完全に卒業しましたのは、小學校と早稲田だけで、後の學校は入ることは入つても、厭氣がしたり、倦いたりして、皆途中で止して了ひました。

そんなら何が遣つて見たかつたかと云ひますと、私は極

く幼い時分から、政治が非常に好きで、それには天分の趣好もあり、色々子供の時の境遇の影響もありませうが、就中私の記臆に殘つて居りますのは、親父が村會議員ぐらゐの村政治家で、學問とては別にありませんが、地方と大坂の新聞を二三種も取つてゐまして、其新聞で得た智識で、能く政治界の偉い人物の話などをして聞かせられました。其話が、深く私の心に浸み込みましたのと、今一つは矢張り幼い時分村の小學校の先生を私の家に置いて、旁々家庭教師のやうな工合で、私は其先生の教へを受けたことがあります。所が其先生が又大の政治好きと來て居りましたので、親父とも

話が能く合つて、何時も其頃の政界の下馬評ばかり遣つて居ました。丁度其の頃が明治二十二三年で、國會開設の當時でありまして、其頃慶應義塾の出身で、新聞記者をして居て、代議士の候補者に立つた者が多數と云ふやうな話もあり、例へば馬場辰猪氏だとか、板垣退助伯だとかゞ、盛んに唱へられた自由民權論の如き、哲學思想と政治論とを交ぜた熱烈なる議論が、私の耳に譯もなく唯々理想的に響いたものです。其所へもつて來て、親父が、其新聞記者が代議士になると云ふやうな話をするものですから、自分も文章を書いて新聞記者になり、それから代議士になるのだと云ふ空想を

描いて居ました。

其頃から又歴史が非常に好きで、殊に歴史中の人物が、私の目には美ましい程華やかに映つたものです。それで、小學校の先生が自宅で教へて呉れますものが、日本歴史とか十八史略とか云つたやうなものでありましたが、殊に、日本外史の源平の盛衰興亡だの、南北朝の爭だの、平家の壇の浦滅亡だの、義經の奥州衣川の戰死だの、楠公の湊川の討死だのが頼山陽先生の文章に依つて、私のまだ清かりし胸に實に〳〵云ひ難い悲壯な、遣る瀬のない感を與へました。假令私が此のまゝの下らない人間で、此の一生を朽ち果てやうとも、無邪氣なる少年時代に在つて、あの愉快なる日本外史を讀んだ功德は、決して忘れやうとも忘れることが出來ません。

今でも毎年正月になると、今年からは必ず日記を書いて見やうと書き初めて見ますが、何時でもそれが五日と續いたことはありません。所が、十四五六の時分は、不思議に日記を毎日〳〵詳しく全三年間と云ふもの、缺かさず書いて居ります。今それを出して見ますと、其中に今お話ししましたやうなことを書いてあります。勿論文章などは成つて居りませぬが、其頃は意思が感情に依つて強められてゐたやう

に思はれます。

今考へて見ると、其時分には、總べて自分に對して、眞摯で熱心であつて、どんな事も眞面目でありましたが、段々年を取るに從つて、人間が雜多の意味で、生活に疲れて、私の物事に對する熱心と眞摯とが剝げて、取れたやうな氣がして、其時のことが今更に、深いやうな、甘いやうな、遠いやうな氣がして懷しく、何うかして其時代の心持になりたいと思ひますが、何と思つて見ても、一度褪め果てた心には、其時分の清新な美しい感情は再び複る機會もなく、永へに消え失せて了ひました。それを思ふと私は唯悲しくなつて來ます。

で、兎も角も中學校に入ることは入りました。入つて居ります時に、繪畫と、漢文の教科書に、其の外史を使つて居りましたので、それは自分でも得意でありましたが、數學と來たら實に分らなく、おまけに其時分は、中學の一年から、幾何でも、代數でも原書でやつたものですから、試驗の時には、何時も落第點にかす〳〵で、漸やく進級したものです。畫は百點でした。で、中學校も途中で飽いて了ひました。前にも言ひましたやうに、子供の時分から遠い先の空想を描いて、手元のことが何も出來ない性分でありましたから、數學が出來なくなりますと、又先のことを考へ出しまして、實業家にならし

うかと思ひました。それと云ふのも、一つは慶應義塾と云ふことが絶えず頭を離れずにあつたからでせう。と云ふのが、福澤先生の實業を奬勵した言論に、又た影響された結果です。まあ何にでも影響され易いのですね、

所が、村政治家たる親父が、また商業は元から好きでありましたから、私の志を語つて、中學校を止して大阪へ行き、其頃の商業學校に入りたいと頼みました所が、親父も氣の早い男で、それはよからうと直ぐ承知して呉れました。で、中學校は二年で止して、明治二十七年の正月、大阪へ行くことは行きましたが、一年の入學試驗を通過して更に二年への編入試驗を遣つてゐる中、試驗が中途で厭になつて、其儘止して又國へ歸りました。さうして、其夜更に初めて東京へ出て、慶應義塾へ入りましたけれ共、生憎親父が亡くなりましたから、東京には三月ばかり居つて歸國して了ひました。

それから引き續いて二年ばかり國にゐまして、父が生前から遣つて居ました米穀取引所――――充り米相場の仲買の所に其の一年間は居りました。それから廿九年の秋更に三度目に東京に出て來て、或は國民英學會に入つて見たり、或る漢文塾に通つたり、學校へは行かず、下宿でごろ〳〵してゐたり、又國へ歸つたりして、其間に文學の本なぞ些い〳〵

讀んで怠けて居りました。で、さうしてゐながら、始終前途の空想にばかり耽けつて、それがまた實行出來るやうに思つたのです。が、遂々年も次第に取つて來ましたので、最う之れでは何か一つ定まつた學校を遣らなくては可けないとずる〳〵に思ひ付きまして、初めから餘り進みませんでしたが、早稲田へ入りました。それでも早稲田に居ります間は、何時とは知らず次第〳〵に頭がエンライツンされて、愚痴は云ひながらも、實際學校生活で益せられた所も多いのは事實です。

所で、私の癖としまして、一身上のことを、始終あゝもしやう。斯うもしやうと考へて居ながら、それははんの空想上のことでありまして、實際、何うして、食はうと云ふやうなことには思ひ寄りませんでした。それればつかりではない。將來生活の保證たる資格なんといふやうなことには何となく脇を向くといふ風でした。何にも考へはありませんでした。所が學校を出ると坪内先生の世話で、博文館へ入ることになりました。入つて五六月の間は、熱心に遣つて居た意りでありましたが、段々いろんなことに氣が付いて來ると、又下らないことばかりのやうに思はれて、何だか興が醒めたやうな氣持がしまして、今では其まゝ辛棒して居つたなら可か

つたらうと思ふやうな所をもブイと出て了ひました。出る時分に、あそこの編輯局長の坪谷さんが、「些い〳〵又煙草錢でもお書きなさい」と歸り際に言ひましたが、其折の私には、それが何のことやら、意味は分りませんでした。いろんな空想をして居ながら、案外實際のことを考へて居ない私は、「書いて金を取る。」と云ふことに――、うといのでありますが、全く氣が付かなかつたのです。

所で、出て見ますと、初めて、勿論博文館に入ると同時に學資は來なくなつてゐたのでありますから、何うして食つたら可いか分らなかつたのでしたが、其時初めて先の坪谷さんの言葉の意味が分つたやうな氣がしました。實に間の抜けた話ですが、實際のお話しです。で、實際遣つて見ますと、私のやうな者でも、飜譯でもすれば、半紙一枚が三四十錢になるので、全く不思議のやうでした。原稿料といふものは安いやうで高いものですね。それがしかも私が二十六の時でした。

然う云つたやうな次第で、生活の爲めに理詰めになつて書いてそれを金にして口を濡らして行くより外に、仕方がなかつたのです。

で、倩々考へて見ますのに、私は小説も好きで無論書いて

見たいとは思ひますが、何ですか平凡人の一生、或は一部分を取つて、作物の題目にするのは、實際は意味が深いのでせうけれ共、私は何となく飽き足りません。若し其れで相當の名を得るとしても多分私は自己に對して滿足しないでせう。日本外史や、十八史略を讀んで、幼少の頃に養はれたロマンチックの趣味は、依然として殘つて居る。私は其ロマンチックの趣味を、誰れが何と云つても、十襲して保存して置きたいと思ひます。靜かに其の趣味を反省して見るのに、私にはそれが實に得難い趣味であるやうに思へます。で、其趣味から云ひますと、私が、若し文筆の人間として世に立つならば、ギボンがローマ衰亡史を書くとか、或は司馬遷が史記を書くとか、云つたやうなものを書くのが、樂みであるやうに考へます。

此の意味の歴史家は、文章家であると同時に、哲學者であり、經世家であり、文明批評家であるのです。けれ共それが實際となると、私にはまたとても那樣精力はないでせう。少くとも境遇が許さない。少年の頃空想してゐた新聞記者も今日となつては、私には下らぬものゝ一つです。で、仕方なく、其日〳〵に追はれて、充らぬ飜譯をしたり、行らぬ短篇小說の眞似をしたりして、次第に年を取つて此の一生を終るので

せう。私も最う三十三ですものねえ。

片上天弦

私が文學者にならうと考へをきめたのには、別にこれといつて際立た動機もなかつたやうに思ふ。初めのうちは、ただ文學が好きであるといふまでゞあつたのが、中學を卒業して後のいろ〳〵の事情が、その漠然とした好き嫌ひの感情に、道理上の是認を與へねばならぬやうになつて、自然私自身では、いろ〳〵考へたこともあり、また今尙さま〴〵に考へ迷うてゐるところなのである。

多少とも自ら意識して文學をやらうと考へをきめたのは中學卒業前後のことですが、自分では立派にきめたつもりでも、他から見れば隨分あやふやなものであつたでせう。私が國から東京に出た年、同郷の先輩で、札幌農學校を出られて、その頃「二六」などに特別寄書家のやうな關係で居られた菅菊太郎氏と、今一人札幌中學を出た人と私と三人で、麻布の簞笥町に自炊生活をしてゐたことがありますが、その菅氏の同窓で、西垣規矩氏といふ人が、時々遊びに來られ、われ〳〵を相手にしていろ〳〵、前途の志望などを聞かれた。その時分私は私相應に自分の覺悟を述べたつもりであつ

たのですが、西垣氏は非常に私の考へに反對せられ、文學などで生活は出來ぬから寧ろ今のうちによした方がよからうといつて切りにとめられた。私は甚だ心外に思つた。さうするとと二三日あとで菅氏が、あれは君の意志が強固でなさうだから、試みに西垣氏が否定して見たのだといふことを話された。その時の私はハッと思つた心もちは今でも覺えてゐる。その時私は十七であつた。その後いろ〳〵の事情で一年ばかり國へ歸つてゐて、二度目に早稲田へ入つた頃には、前よりはいくらか自分でも考へるやうになり、眞面目に一生懸命でやらねばならぬといふことにも氣がつき出した。しかしながら、かういふことは、自分相應には考へたつもりでも、幾多の「西垣氏」の眼には何と見えるか知れぬ。私なぞは、これからまだ幾度も〳〵形の違つた西垣氏に出くはして、まだ幾度もハッと思ふことがあるのでせう。

小川未明

僕は未だ文壇の人ではない。然し將來に於てはなり得ると信じて居る。早稲田に入つてから今迄書いた短篇に對する世評は、作者たる僕に言はせると大いに誤つて居る。殆んど僕なんかは、非自然派と云ふ名の下に、虛名を賣つた傾き

である。僕の名が今多少文名に在るものとしたなら、本當の名ではなくて、虚名かも分らぬ。それ故、批評家に批評して貰つても、自分の胸にこたへる批評は、之れまでなかつた。

僕の今は要するに手習ひ時代だと思ふ。將來に於て大作を出した時に、始めて文壇の人と言はれる。今では未成品だと信じて居る。僕は、實際世評に關せず、過去の自作を顧みて二度繰り返して讀んで、自分に感心が出來るやうな作が幾つあるかを疑ふ。「愁人」にしても「綠髮」にしても、實際厭やな感がして手に取る氣にはならぬ。然し、俯仰して天地に耻ぢないのは、僕の之れ迄の作物は、毫も自分の感情を偽らずして、感じた所を正直に書いて來た所である。要するに自分の趣味や好尙と云ふものは、世の中は何うあらうとも問ふ所ではない。只、今の作品では、未だ文壇の人とは言はれないと思ふ。又、偽らず白狀すれば、今の文壇の人と言はれても、實際難有くはない。

三　島霜川

幼い時から、小說類を讀むことが好きで、十二三の頃から古いものでは水滸傳だとか三國志だとか、新らしいものでは涙香の飜譯物や、南翠の作を好んで讀んだ。無論、其時分は文學なるものゝ意味が分つて讀んだのでもなければ、又、文

學者にならうと思つたのでもない。唯、譯も分らず好きで面白くて無茶苦茶に讀んだのである。

其中に十七八の頃、國民之友の附錄かなんかで、長谷川二葉亭氏の例の「あひびき」を讀んで、何たか小說家になつて見たいやうな氣がしたが、其時代は文藝が今ほど社會に眞面目に認められては居らず。誰に云ふとも、誰に相談するともなく、私かに自分で考へて居たまゝである。

然し、然うした小說類を暇さへあれば耽讀して居る中に、無味乾燥な敎科書類が面白くなく、親父の入れると云ふ學校にも入らず、毎日ぶらぶしして、好きな小說に讀み耽つて二三年間と云ふもの、怠け者のやうに要領を得ずに暮した。其間に些つと金澤へ行つたことがある。

十九の年、それまで誰にも話さなかつた小說家になりたいと云ふ志願を親父に打ち明けて、其許しを乞うた。所が一體僕の家と云ふのが、古くから代々醫者で、僕の知つて居る所では、四代だけは明らかである。それで親父は一かどの醫者にする意りでゐたのだから、文學者志望を許して呉れない。何うしても醫者になれと云ふ。實は、親父自身も醫者が大の嫌ひで、政治家にならうとして、何彼と理屈をつけては家の稼業はおつ放り投げて飛び出し、三十になるまでも方々

を放浪して歩き廻つたものである。

それくらゐであるから、政治に非常なアッピッションがあつて、僕の小い時分には、僕を英雄仕立にして、自分の政治上に於ける燃えるやうなアッピッションを、僕に移し、僕を通して自分の其野心を滿足させやうとしたのであつた。所が、僕は小い時から非常な神經質で、元氣とか云ふものがなかつたから、親父は失望して、英雄的に育てることは斷念し、醫者にさへすれば、食ふには困らぬからと親心を起して、今度は相應な醫者にしやうと決心したものである。それで、何うしても文學者になることを許さない。そして僕の希望を

否定するのに、お前にはとても文學者になれる腦力はない。文學者として世に立つて行くには、大家になれば別だが、生活が中々困難である、お前のやうな意志の弱い人間には、到底大家になれる望みはないと云ふので、何も文學其物を否定するのではなかつた。

然し、僕は何うしても文學志望を斷念して、親父の希望通り醫者になると云ふ決心も出來ず、どちら付かずに生若い人間が、毎日ぶら〳〵して居る。で、家では親父初め餘り好遇しては呉れなかつた。自分の意志は通らず、家では侮辱を加へられる。面白からぬ日を送りながらも、文學者になりたい

と云ふ希望は益々強くなるばかりで、消えやうともしない。それで、折りを見ては許して呉れるやうに頼んだものである。

所が、親父も終ひには、僕の意志を飜すことが出來ないと思つたものか、遂々許すには許したが、それ程文學者になりたいなら勝手になるが好い。俺れは其爲め一文も學資を出さぬから、お前はお前の力で遣れと云つたやうな、皮肉な許しであつたので、少しは悄氣たが、それでも好きな道だから何うしても遣り遂げるといふ決心をした。そして五六十圓を得る爲めに親族間を奔走した。駄目なので、已むを得ず友人に貸して居た金を五六圓集めて、それを持つて、九月と云ふに袷一枚で、東京に飛び出し、大膽にも下宿して金のあり丈け其頃の雜誌を買ひ集めて、それを下宿の狹い室で一生懸命に讀み耽つたものである。其時然うして本をしみ〴〵讀んだのが、僕の文學生涯に入つた殆んど出發點であつた。そして、傍ら譯の分らぬものを書いて居た。其時、最も頭に印象されて、僕の文學崇拜の念を益々深くしたものは、森鷗外氏の水沫集一卷、其中でも「埋木」と「うたかたの記」と、內田不知庵氏の「罪と罰」とである。無論「あひゞき」も絕えず傍に置いた。それ等の作物を耽讀すると云ふよりは、寧ろ熟讀したもの

である。それに、森田思軒氏の「懷舊」と云ふものを讀んだ。要するに、何うしても文學者にならうと云ふ決心を定めたのは、それ等の本を讀んだ結果である。其傍ら書いて居たものと云ふのは、今から見ると、何の意味もない、詰らぬロマンチックなもので、文章は思軒を眞似て居た。

それと同時に、宮崎湖處子のものを愛讀して、其新體詩なぞ眞似たものである。が、前に擧げたもの程、敬意を持つて讀まなかつた。出京後無論國からは送金をして呉れないので、其當時、僕の下宿生活は實に慘憺たるものであつた。九月に出て來て裕一枚で其冬を越したくらゐである。それで、時時悲しいやうな抒情文のやうなものを書いて親父に送り、眞面目に修養すると云ふことを繰り返して云ひ、暗々の中に金の保護を仄めかした。然んな手紙を二三度も送つたが、無論何の効果もなかつた。

然う斯うする中に翌年の四月、國から義理の叔父が出京して、親父の長い〳〵手紙を持つて來た。先に送つた僕の悲しいやうな抒情文が父を動かしたのか。或は其抒情文に依つて多少僕の文學的の才を認めてくれたのか、文學者たることを許してくれたと同時に、當座の小遣ひとして金を十圓だけ托送して呉れて、後は月々正式に送ると云ふことで

あるそして、親父の其手紙に依ると、早稲田にでも入つて、眞面目な修養をなし、文壇に雄飛して呉れいと云ふことである。其時、手紙の中に、其頃毎日新聞に出た、文學者になるの苦しいこと、其生活の困難なことなど書いた論文を切り拔いて同封してあつた。

親父も許して呉れるし、學資の方の心配もなく、漸く安心して間もなく、恰度其手紙が來てから二週間も經つと、突然親父が病氣だと云ふ報知が來て、驚いて取るものも取り敢へず歸國して見ると親父は死んで居る。僕も、實にがつかりしてしまつた。

手紙には書いてなかつたけれ共、家の者の話に依ると、親父は僕を愈々文學者にすると決心してから、從來自分の方針を一變して、家政の改革をなし、建てかけて居た家なども中止し、僕の爲めに犧牲になつて、大いに金を溜め、僕の卒業後は獨逸にでも留學させやうと云つた意氣込みで、自分のアツピツションを僕に濺いで、文學の方面に大いに發展させるやうに決心して居たとの事である。

僕が之れまで、自分の目的に趺蹉に趺蹉を來し、幾度びか斷然吾が志を拋たんと欲して、拋ち得ざるものは、親父の決心を思ふと、僕は飽くまで此の目的を貫徹せなければ生き

ではゐられないと、奮然として勇猛心を起すが常だ。これ全く親父の賜である。

親父は死ぬるし、親族には文學なぞの分る連中はない。皆口を揃へて醫者になれ〳〵と口やかましく勸める、其四面楚歌の聲の中に立つて、一年ばかりぶら〳〵して居る中に、親父の建てた家も、殘した金も滅茶々々になつて、僕は市井の間に埋つて了つた。

で、父から遺産どころか、荷厄介な遺族を殘されて、未だ力のない者が、其重荷を負ふてよた〳〵と今迄遣つて來たのである。

それで、父に死別れたのは二十の時で、僕は神經衰弱になるし、不得要領の中に、一年と云ふ長い月日を滅茶苦茶の中に送つて了つて、そして二十一二の春ころまでは、書くでもなく、書かぬでもなく、貸してあつた金を取つたり、家財を賣つたり、誠に混沌たる生活をした。其間田中涼葉なぞと一緒に下宿したが、其中涼葉は紅葉先生の塾に行くし、僕は一人になつてごろツちやらして居たが、それではごろつき書生になると云ふので、叔母なぞが心配して、其一年ばかり前から心易かつた桐生悠々君の所へ行くことになつた。

桐生君は、僕の文學生涯には忘れることの出來ない人で、

其所に行くまでは、文學が好きであつたが、唯、意味も何も知らずバッとして居た。其時桐生君は法科の二年であつたが、始終シエークスピーヤだとか、トルストイなぞを。說いた、僕はそれに依つて泰西の文學を知り、眞面目に文學を研究し眞面目な意味に文學を了解して來て、其所に三四月居る中に、何であつたか書き初めた。

それで、其時は最う生活費の方は盡きて、桐生君の所を出てから、七月ごろ七軒町へ家を持つて、翌年の四月まで、約十ヶ月其所に居つた。其時一家四人、露骨に云ふと殆んど三度の食事も食ひ兼ねた。それは、僕の最も暗黑時代で、未だ一家を支へるだけの腕はなし、頭は固らず、讀んで修養すべき書物はなし、不安恐懼に滿ちた生活をして居た。

其時のことである。名は差支へあつて言はれぬが、某と云ふ。僕の同鄕の禪坊主と共に、食ふに困つて托鉢に出やうと云ふので、袈裟や衲衣もすつかり買つて、僕は經なぞ稽古したが、何分俄仕度くなので、どうもうまく覺えられない。それで證道歌の正心銘を紙に小さく書いて、笠の裏へ張つたものである。そして、市内では巡査が喧ましいから、府下を歩かうと云ふので、明日から愈々托鉢に出ると云ふことまですつかり定めて、總ての準備は整つたが、都合があつて止して

了つた。

それから、何うしても、書かねば食へないやうになつて初めて書いたものが、「一つ岩」である。

次に書きかけたのは、長いものであつたが止して、其中に「埋れ井戸」と云ふものを書いて桐生君の紹介で春陽堂に賣つた。其賣方が、僕の才の方をば推稱せずして文學が非常に熱心で其爲め財産を總て蕩盡したとか何とか云つて賣込んだものである。それで、石橋忍月氏が大いに同情して、其年の懸賞小説の中に入れて發表された。僕の作として最初のものは、「一つ岩」なのだが、「一つ岩」はそれから二ヶ月ばかりして、「紅葉先生」に見て貰つて所が、面白いからと云ふので「世界の日本」に賣つて貰つて、原稿料を二十圓得た。「埋れ井戸」の方で三十圓貰つたが實に嬉しかつた。

「一つ岩」を賣つた緣故で、佐久間秀雄と云ふ人に二三度會つた。そして、佐久間氏に口があつたらと賴んで置いた所が、恰度竹越三叉氏が人民新聞(東京新聞の改題)をやることになつたから入らぬかと云ふ。そこで表面竹越氏の推薦で入社した。

それが、僕の文學社會に出た初めである。

何時頃から文學者にならうと思つたかと云ふ事は、自分でもはつきり記憶してゐない。然し高等小學校を卒業する時、將來の目的を問はれて、確か美術家か醫者かになると答へた。其後別に何にならうと取定めた考へもなく、兎に角中學へ入つたが、其頃から文藝倶樂部などは非常に面白く讀んでゐた。

中學に入つてからは、一時工學士にならうと思つた事もあつたが、それも唯ださう思つた丈けに過ぎなかつたのである。私の生れた三河の國あたりでは、その當時はまだ浪六や涙香もの位しか讀むことは出來なかつたが、其れでも次

第小說が好きになつて、家にある漢籍などを引出して、小說本と取換へては讀んだものだ。

東京へ出て來たのは三十二年であつたが、其頃も矢張り小說は好きで、種々と讀んだ。其のうちで、眉山のものを友人に借りて讀んで、非常に面白いと思つた。其れから、紅葉露伴のものを讀み出し、初めて眞實に小說と云ふものが好きになつたのである。で、中學を卒業したら――其頃本郷の京華中學に居た――大學にも進んで、文學士にならうと思つて居た。處が偶々三十四年のある時、川上さんと小栗先生とが神樂坂で酒を呑まれたと云ふやうな記事が、新聞に出て居

て、それには先生の住處が書いてあつたが、其當時は學校へも碌々出ず遊んで居る頃だつたので、つい訪ねて見る氣になり、二三度お訪ねした。さうかうするうちに、次第と文學の方へ接近して來て、何か翻譯物も二つ三つやつた。其うちに中學丈は卒業したので、一先づ故郷へ歸つた。歸つて、三四ケ月も暮したらうか、其うちにどうも厭で〳〵仕方ないやうになり、此度は進んで學校へ出る事は廢して了ひ、其代り三十圓丈貰つて再び東京へ上つて來た。其れから、愈々自活する積りで、一時裏神保町の或る小學校の教員となつた。然しどうも思はしくないので、三日出た限り止めて了つた。其時

給料を確か一圓貰つたやうに記憶する。

、其樣な風で東京でも思はしくない處から又故國へ歸る事に定め、小栗先生の處へ行つてさう云ふと、其れならば强ひては止めぬが、又可い事があつたら呼び出すと云つて下すつた。その折り先生と二人で、當時築土前町に居られた德田先生の處へ行き、先生に「女優ナ、」を借りて貰つて、其れを抱へて新橋を立つた。歸つてからは、まだ中學を卒業したばかりの英語の力ではあつたが、明けても暮れても、其飜譯に一生懸命になり、遂う〳〵熱心でもつて一冊飜譯して了つた。百枚ばかりの原稿であつたが、先生の氣に入つて、何時で

も可いから出て來いと云ふことだ。で、翌年三月上京して、愈々先生の門弟となつたのである。其後は唯だ書生が年を取つたと云ふに過ぎぬ。別に變化もなくずる〳〵と今日まで經來つたのだ。

月日が經つうち、去年あたりから文壇が著しく動搖して來た。其の激動に搖られて、ずる〳〵と、譬へば大きな根を拔く時に、小さい根までがもち上がるやうに自分も文壇の方へ引き出されたと云ふ感じがある。

此れは別な話であるが、眞山君は三日坊主だとよく人が云ふが、私もやつぱりそれだ。眞山君は曾て撃劍をやりだし、唯だの一日で止したさうだが、私もまだ京華中學へゐた頃、一刀流の撃劍を習ひに行つた事がある。けども、三日でやめて了つた。前の小學教員も三日でやめた。此れ等が眞實の三日坊主であらう。

其れから、今一つは京華中學の五年生の時、或る事情から退校させられたので、行き處に困つて、今はないが其頃あつた明治義會中學へ行く事にした。然し之れも試驗を受けては駄目だと思つて校長の處へ頼みに行つた。其時何んでも薄暗い四疊半か何かに通され、待てども〳〵先生が出て來ぬ。退屈してとう〳〵そこで寢入つて了つた。

目がさめて見ると、もう夕方になつてゐるが、まだ先生が出て來ぬ。それから又大分待つと、やツと先生が出て來て、待たせて濟まなかつたが、實は君の來てゐる事をすつかり忘れて、淺草へ墓參りに行つて今歸つたところだとの事であつた。人の處へ行つて寢こむ者もねこむ者だが、其の先生も亦隨分亂暴だと思ふ。此れは一寸した話であるが、以て私の性格を推し量ることが出來るだらうと思ふ。

秋田雨雀

私なんかまだ文壇の人とは、自分でも思つてゐないし、世

間、もさうは思はぬ。だから文壇の人としての話は出來ぬが、唯だ個人として此れまでの生立と、此れから進んで行く私見とをお話しようと思ふ。

扨、文學をやらうと云ふ考になつたのには、別に定まつた理由があるのではなくて、私の體質と生立とが、強い必然をなして、斯かる方面に進ませたものであらうと思ふ。一體私は本州の最極端八甲田の山の麓、青森の港からは九里、弘前と云ふ十萬石の城下からは三里隔てた黑石と云ふ小さい城下の町家に生れた。其の私の生れた町と云ふのは、此地方でも非常に景色の佳い處と云はれてゐる。高い臺があつて、

其の下を淺瀬石川と云ふ大きな川が、白い糸のやうに流れ、岩木山の中腹の方へ流れて行く。其の下が弘前城下になつてゐる。小山内薫と云ふ人の祖先は、矢張其處の人だと云ふ事は最近になつて分つた。

私の父は、私の生れた時は目が見えなかつた。即ち父は其の十幾歳の時、或る家庭上の事情によつて、失明したのである。此不幸なる父に抱かれて、寒い北國の冬を極陰鬱に暮したのは私が幼時の生活である。此の事は後に作物として世に公にしようと思ふから、唯だ此事丈を云つて置かう。私は父が目の見えない代りに、二人前目を開きたい。暗い家庭の代りに、何が新しき光のある處へ行きたいと云ふ二種の希望と憧憬とに、始終刺撃せられてゐた。自分の父の事を云ふ私も可笑いが、父は目は見えないけれども野心のある男で、私が父の代りに二人前も眼を開かうと思ふ心よりも、父が私に眼を開かせようとした心が餘程であつた。其筈である。盲目の自分が、一代の間に多少の資力を私の爲めに方覺して、別に借金なしに私を學校に入れ、それを卒業させて呉れました。

私の小い時から、私の家へは眼の見えない此地方の種々な人が入込んだ。私の父は此地方の漢學者小野川某及び吉

田某と云ふ人等から漢書を教はつた。そして其の中の四十卷は殆んど完全に近く暗誦してゐたところから、眼の見えない人々に其れを教へたり、話をしたりする事を好んでゐた。だから私は其の傍にゐて、父の話をきゝ、或は父の所へ集つて來る多くの盲人の群に抱かれて、種々な恐ろしい話と、可笑しい物語とかを聞いたものである。昔から私の地方には松尾と云つて、浪華節から分離した、一種の唄物がある。其の盲人の一人に此の松尾節を非常に巧みに語るものがあつた。木枯の高く家と森とをふるはす時、家根の低い私の家の座敷に、ランプもなくて五六人の盲人が集り、よく話をしたのを知つてゐる。斯う云ふ時に、私はいつも松尾節を聞いたものだ。其の唄物の多くは、南方の武勇傳で、岩見十太郎が何うしたの、石井常右衛門が此うしたのと云ふ、凡て講談物であるが、中でも色の白い半分眼の見える男があつて、八犬傳の話をば一年ばかりも續けて、私の耳に入れて呉れた。斯う云ふ刺戟は一種のローマンスと云ふものを欲するようにさせたのである。

私は十五の時、三里離れた弘前の中學に入學した。此時はじめて、多少暗い自分の家庭から去つて、幾らか華やかな生活に入つたやうに思ふ。さて其處で同じ年輩の學生と交つ

て居ると、自分は非常に陰鬱であつた非常に恥しがりであつた。所が、此の中學を卒業する頃までには、自分の物事を恥しがると云ふ事が、少からず自分を萎縮させて、どうしても他の人々と戯れたり、遊んだりする事が出來なくなつた。此れが想像する癖を增長させて快活なるべき少年の頃を、極めて陰鬱な、內部的なものにして了つた。其頃ソクラテスの傳記を讀んだ。其他種々な偉人の傳記を讀んだ。そして、自分をなる丈强く高いものにしようと思つたけれども、茲に云つたやうに內部的な陰鬱な自分の性格と矛盾を來し、其缺陷が絕えず自分を苦しまして居る。其れから自分の家の事

なぞを考へて見ると、何となく悲しい。何故自分は斯う云ふ寒い賤しい人生の階級に生れたのであらうか。何故人生に貧富と云ふ懸隔とか、尊卑と云ふものがあるのか、此の疑ひは常に私に附纏て離れなかつた。其樣な事を考へて行く中に自分には階級なるものを打破して了つて、自分は自由の生活に行きたいと云ふ猛烈な反抗を起した。此れは今も尙ほ形こそ多少變つてゐるけれども、もつてゐる事である。

私が、中學を卒業する頃は、遲れた國ながら、新しい思想はずん〳〵入つて來て、今思ふと幼い時分の國と、其頃の國とは陰影の處が餘程異ふやうに思ふ。即ち南方の文明の光が

其頃から私の國に入り込んで來たらしい。其現象として師團も出來た。二三年たつて中學校も出來たで、私はつくゞと暖い國を慕ふ心になつた。

父は俳句をやつた。私も俳句の眞似をしたことがある。が俳句をやつても何だか不滿足であつた。もつと猛烈な積極的なものを望んでゐた所が一人の友達――其れは私等の地方で最も先んじてキリスト敎を受け入れた家の子供――があつて、私は中學校から歸省すると始終其家に遊びにいつた。そして二階で雜誌や新聞をもの珍らしさうに見てゐる中に、四六版の極質朴な本で、唱歌のやうな俳句のやうなものの並んでゐるのを見出した。讀んでゆく中に俳句に似た處があつて、其れよりも、もつと積極的な味ひを感じた何となく自分を此淋しい山に近い城下から引きずつて行くやうな著書であつた。其れは即ち島崎藤村氏の詩集であつたのだ。其本は友達の兄さん――今は米國で或る事業をしてゐる人――の讀んだ者であつたさうな。其れからして新體詩と云ふやうなものが、私にとつて新しい刺戟物となつた。要之私を文壇に接近せしめた最近の動機は、此の信濃の詩人、今は日本一流の文人藤村氏の聲であつた。

もと父は私を醫者にしようと思つてゐた。私も進んで醫

者にならうと考へた事がある。それには一つの動機があつた。と云ふのは、中學の五年生の時、南の方から來た細川と云ふ博物の教師があつて、大變よく出來る人であつたのに、私等の卒業間際に氣が狂つて、隨分種々な噂を立てられた。或る者は學校の金を費ひこんだと云ひ、或る者は又放蕩の結果だとも云つた。けれども私の思ふ所では、其人は決して其樣な事をする丈强い人ではなかつたのである。非常に恥かしがりで、臆病な小心な人であつた。私が矢張り其れだからよく了解することが出來たのであるが、一言にして掩へば餘りに緊縮した人であつた。それを箱橇に乘せて、松平と云ふ文學士と、私等四五人して、雪の深く積つた中を、弘前の停車場まで送つた事がある。其時、箱橇のガラスから中を覗いて見ると、懷しい狂氣の細川先生の顏は、蒼く膨れて、昔のやうな立派な風采もなく、片目は睡り、片目は開いて、まるで無心の狀態であつた。此つを見た時に、又た醫者がもはや救ふ事は出來ないと云つた時に、どうかして斯樣な人を再びもとの狀態に治してやりたいと云ふ濟度的發心を起して、さては父の命令に從つて、自分も醫者にならうと考へた。

其後間もなく私は東京に出た。其れからは全然異つた處へ來たやうであつた。假へば、地獄から極樂へ出たやうな氣

持がした。斯かる感じは話しても他の人には解しかねる事かと思ふ。兎に角私の心的狀態は一變した。私は暗い家庭と不幸なる父とを忘れよう〳〵とした。

學窓の生活は大した影響を與へなかつたが、唯其頃私はハムレットと云ふ人と初めて知合になつた。そして學校へは出ないでカツセル版のハムレットを抱いて、學校の裏の草原に寢轉んでは暮した。滿二ケ年位の間は、學校へも出ず我儘な要領を得ない生活をしてゐたのである。今から思ふと、あの頃は非常に危險な時代であつた。殆んど墮落しやうとしてゐたのを、勵まして呉れたのが片上天弦君である。其の意味から片上君は私の恩人と云つてよい。そこで私は再び昔のやうなグルーミーな、恥かしがりな人間にかへる事が出來た。「同性の戀」と云ふ小さな作をしたのは、其れから二年後である。

信濃の詩人は東京へ出て來た。そして「破戒」と云ふ大作を世に出した。陰鬱ながらも此の堂々とした平原の詩人を憧れる情を益々深くした。私は一體アドマイアなしに生活は出來ない人間である。南方を慕ふやうに信濃の平原を慕つた。丁度其のやうに、私は文壇を戀ひ慕ふの情がいまでもある。文壇に如何なる形をもつて出るかと云ふことはまた

はつきりした考もないが、唯だ自分は心の中に生ずる一種の世界、一種の國、即ち凡ての行政、凡ての社會狀態以外に、矢張り一種の自由な國が出來得るものならば、其の國を創造(つく)るには、どんな性質のものでもやつて見ようと思ふ。唯だ自分は、何となく自分を短命のやうに思ふ。イブセンの「リツトル、アイヨルフ」の中に出るアイヨルフと云ふ子供があるが、自分は、其の子供のやうな氣がしてならぬ。此樣な事は如何(どう)でも可(い)いやうな話であるが、一種かう內部的の野心と體質から來る臆病とは、始終私の小さい胸の中で爭ひ戰つてゐるのである。前にも云つたやうに、私は文壇の人にならうと考へるのは、此れ等のものを結合した、一種の必然(ネセシチー)に外ならぬのである。

現代文士二十八人集 終

跋

初對面によりて直感し得たる第一印象を基礎として、現代文士の人物を評論したるものなり。從來人物評論の古き形式と型に入りたる觀察とに倦ける吾等は、如斯新味ある人物批評を見ることに少なからず興味を覺ふ。觀察或は正鵠を得ずと雖も、又一面吾等の胸に徹するところあり。筆鋒も鋭ぐして痛快なり。一讀して面白き書なり。

明治四十二年五月

風葉散人

明治四十二年七月十日印刷
明治四十二年七月十六日發行

現代文士廿八人奥付
定價金四拾五錢
（郵税六錢）

著者　中村武羅夫
發行者　東京市本郷區天神町二丁目廿五番地　日高藤兵衛
印刷者　東京市神田區三崎町三丁目一番地　小西幸吉
印刷所　東京市神田區三崎町三丁目一番地　日本印刷株式會社
發行所　東京市本郷區天神町二丁目廿五番地　日高有倫堂

著作權所有

大賣捌

明治四十二年七月

東京市神田區表神保町　東京堂
東京市京橋區中橋廣小路前　誠文堂川瀨日進堂
東京市日本橋區住吉町　上田酷屋社
東京市神田區裏神保町　磐吉岡寶文館
東京市京橋區尾張町　大阪市備後町四丁目　福音社
大阪市心齊橋南久太郎町　星野文星堂
名古屋市玉屋町　小川澤瀨百架堂
名古屋市本町　東枝書店
京都市佛光寺通烏丸　寶文館
京都市二條川原町　積善館
神戸市元町　友田藤助
岡山市西大寺町　奥田金昌堂
廣島市驛屋町　白銀日新社
廣島市東横町　支店
周防國岩國町　上山文英堂
山口大市町　仝
下の關市西南部町　菊竹
筑後國久留米市　長崎次郎
熊本市新町

筑前博多麴屋町　高田書店
横濱市吉田町　有隣堂
横濱市辨天通　正心堂
信州上諏訪町　宮坂日新堂
信州松本市　松榮堂
信州長野市　西澤
越後國長岡　寶張次平
越後國水原　西村六平
越後國新潟古町　西村支店
高岡市守山町　學海堂
金澤市片町　宇都宮書店
水戸市泉町　川俣銀藏
前橋市曲輪町　仝乎
宇都宮市馬場町　仝支店
宇都宮市鐵砲町　內田正榮堂
仙臺市大町　藤崎書店
陸中一の關　佐藤喜平
弘前市土手町　今泉道太郎
秋田縣增田町　東海林
北海道札幌南一條西三丁目　富貴堂
北海道函館土藏町　小島大盛堂
清國大連市大山通一丁目　濱井松之助

四十二年七月印刷
毎月增補訂正改刷ス

有倫堂出版書目

東京市本郷區天神町二丁目廿五番地

日高有倫堂

大町桂月
樋口龍峽 共編

新刊

千波万波

國入上製 定價金一圓廿錢 送料金拾錢

本書は井上、新戸邊、芳賀の三博士を初め、德富蘇峯、樋口龍峽、久保天隨、大町桂月、小杉天外、廣津柳浪、柳川春葉、三島霜川、小川未明、馬場孤蝶、木下尙江、大野洒竹、國府犀東、伊藤銀月等數十の大家の論文あり、小說あり、紀行文あり、隨筆ありて、現代文壇の精を鍾め、精を拔く、是れ文海の珍書、千波萬波の壯觀を極む、

樋口龍峽
大町桂月 共編

新刊

寄る波

定價金五拾五錢 郵稅金八錢

本書は、田岡嶺雲先生の絶作を始めとし、短篇あり、論文あり、美文あり、皆一代の名文机邊の好伴侶、好文の士必讀の好文集なり。

大町桂月序
小栗風葉跋
王春嶺著

新刊

現代文士 一一十八人

定價金壹拾錢 郵稅金六錢

本書は現時の文壇に活動せる文士二十八人を選み、初對面の第一印象に依りて、其人物を縱橫に評論せるもの也。著者の眼光直ちに人の肺腑を洞察して誤らず、筆路亦公平にして毫も私情に阿らず、此一書に依りて現代文士の人物を側面より遺憾なく覗ふ事を得べし。

田口掬汀著 中村不折氏畫

新作

小說 猛火

定價金一圓貳拾錢 送費拾錢 製本美

源志翁行の小說のみ產出せらるゝ時、感奮の高潮に達したる人物を描きて、雄大の氣魄を示せる此大作の出でたるは現時の文壇空谷跫音を聞くの感あるべし、軟弱媚柔の作物に倦厭したる讀書子は必ず此大作を一讀せられよ

樋口龍峽著

新刊

社會論叢

定價金五拾五錢 郵稅金六錢

本書は著者が最近數年間の論策を輯めたるもの高遠なる學理論あり社會學の見地より見たる時事問題の論議あり。法律論あり。政策論あり。學者經世家たらんとするもの必ず本書を一讀せざる可からず

伊藤銀月著

成功指針

定價金三拾五錢 送料金六錢

眞の成功法は手品にあらず魔術にあらずゴマカシにあらずイカサマにあらず進んで躍かす必ず目的地に達すべき坦々たる大道あり之を明瞭に指示するは本書を措いて他にあらざる也

英國 アートルピー、ズーザアス著
日本 松居松葉譯

市營と私營

定價金四十五錢 郵稅金六錢

此書を讀むと市營事業と私營事業の利害が分る、苟くも事業經營の發達富裕を圖らんとする市町村及び其事業に關係ある市町村民は是非共此書を讀まざる可からず

伊藤銀月編

近刊

机上圖書館

全八冊國入 價金三圓

本書は「机上圖書館」と表記したる雅致ある箱に收めて座右に備ふべく、苟くも書籍に趣味と實益とを求めんとする時之を開かば坐ながらにして圖書館に入ると同一の結果を得ん豈空前の有用書にあらずや、

大町桂月　白河鯉洋
笹川臨風　樋口龍峽　合編

新刊

むら雲

定價一圓五十錢　郵税拾貳錢

豪宕不羈の奇と才を以て明治の論壇に濶歩せし田岡嶺雲先生今や病床にあり先生の知人故舊乃ち一大文集を編して先生に呈し其病を慰めんとす筆を取るもの數十名皆當代一流の論客文士政治家あり。學者あり、小説家あり明治文壇の偉觀敬めて集中にあり、

故綱島梁川譯

再版

ルナン氏　耶蘇傳

價壹圓五十錢　郵税十錢

本書は故梁川氏念心愛讀の書にしてルナン明快の想と梁川瑰麗の文に接せんとする士は本書を繙け

伊藤銀月著

小説

怒濤

定價八拾錢　郵税拾錢

是れ一氣呵成一百二十余回に連れる雄篇にして當代無比の妙文を以てす蓋し一時の投機的作物にあらず眞の小説を讀まんとする者は此書を逸すべからず

田口掬汀著

小説

女夫波

定價一圓廿錢　郵税十錢

小説

伯爵夫人

上下各定價八十五錢　郵税八錢

田口掬汀著

小説

一葉草

定價八拾錢　郵料金拾錢

今の小説の材料は大抵男女の情事である、然らずんば肉慾派と稱する牛肉屋か豚屋見たいな冠詞の下に書かれる淫事だ。「一葉草」は流行の奥さ味なしと著者自ら自慢の名作也

近刊

小杉未醒譯　並ニ畫八十餘枚挿入

絵本新譯西遊記

定價八十五錢　郵税八錢

當代の奇才未醒、千古の奇書西遊記を新譯す、物當に其處を得たり、八十有余の漫畫的挿畫羅漢簡素なる譯文と相俟つて諸君の苦惱より解脱せん也

社會學專攻文學士　樋口龍峽著

社會論叢

定價四十五錢　郵税金六錢

本書は著者が最近數年間の論策を纏めたるもの高遠なる學理論あり社會學の見地より見たる時事問題の論議あり、法律論あり、政策論あり、學者經世家たらんとするもの必ず本書を一讀せざる可からず

江見水蔭著

小説

女馬賊

定價九拾錢　郵税拾錢

○回數百餘拾錢回に亘る大作○文學的の冒險小説、詩化されたる事實談は是也實に近代の快書也

安倍磯雄著

應用市政論

定價一圓廿錢　送料十二錢

○總クロース上製四百八十頁○

是れ國民の爲に新奇なる都市問題を紹介したる市民讀本也

伊藤銀月著

机上圖書館第六編 文學梗概

定價卅五錢　郵稅六錢

本書は各種文學の分類美の原則詩想詩形文體の法則描寫の態度其他各種の問題を網羅し平明簡深に文雅的修養を得せしむ文學を愛する人に向つて手頃の參考書なり

社會學專攻文學士　樋口龍峽著

社會主義と國家

定價拾五錢　郵稅四錢

近時社會主義を唱導するもの動もすれば奇矯過激に亘り徒らに世を騷がし誤解を招く本書之に慨し此主義の爲に妄を辨じ惑を解す社會問題に着眼する人士一讀を望む

小松小兒科院長　小松貞介先生著

近刊

實驗 小兒保育法

定價五十錢　郵稅金八錢

○健康兒の卷、虛弱兒の卷。

快活なる健康兒を得んと欲すれば先づ此書を繙け

獨逸哲學博士　ドイセン原著　高橋五郎譯

近刊

古今東西 哲學通解

定價八拾錢　送料八錢

本書は純正哲學美學及び倫理に三大別して詳密に哲學の大體を描寫し哲學の何物たるやは氏に至りて初めて萬人の領會する所となりぬ高橋先生該書を飜譯し數百萬の哲學志望者を滿足せしめんとす

伊藤銀月著

再版

偉人達人

定價卅五錢　郵稅六錢

奇を愛する銀月先生が趣味を以て古今東西二百有余の偉人達人を選び卷を開けば豪宕なるもの飄逸なるもの奇趣横溢せるもの痛快淋漓たるもの偉人の面目躍々人に迫る眞に人界の大觀奇觀也之を讀んで凡骨を磨礪すべく有爲の氣象を養成するに足るべし

伊藤銀月著

机上圖書館第五篇 新家庭觀

定價參拾五錢　郵稅六錢

本書家庭に於ける總ての問題に對し最新の思潮を網羅し既に家を成せる人に對し覺醒を與へ將に家を成さんとする人に向ひ最良の指針を與ふ之を讀んで興味と共に實益を得るや疑無し

佐々醒雪
白河鯉洋序　稻田薄光編

家庭文藝

名論卓說

定價四十五錢　郵稅八錢

本書收むる處は皆其道の代表的人物を捕へ來たりて其宿論を叩きたるもの實に近來の名論卓說と謂ふべし加ふるに附錄として醒雪先生の百人一首俗譯解を附す

文科大學講師 夏目漱石先生校閲 上田敏先生序文 ／ チャールス、ラム著 文學士 小松武治譯

十一版 標註 **沙翁物語集**

定價七拾錢　郵税金拾錢

苟も沙翁戯曲の何たるやを覩んと欲するの士は須らく一本を購ふて座右に備ふべき也。

戸川秋骨著

時代私觀

定價四拾五錢　郵税金六錢

本書收むる處の諸篇政治社會文藝宗教及び現代思潮の如何を知らんと欲するもの須く一本を備ふべきなり。

伊藤銀月著　小杉未醒畫

再版 **新譯水滸傳**

定價八十五錢　送料八錢

朝鮮より延いて支那をも我と混一視するの抱負ある日本男兒は必ず之を讀むべしされど馬琴蘭山の舊譯は唯だ其皮相のみ銀月君が言文一致の嶄新なる譯文成りて原著却つて顏色を失ふを見る

匿名隱士著

八版 **破天人論**

定價參拾錢　送料六錢

天下を風靡したる天人論に對つて逐條討議的に堂々駁論を試み三一哲學の宇宙觀と人生觀とを鼓吹したる壯快の書也

鵜島梁川著（菊版總クロース頁數約千頁）

廻版 **梁川文集**

定價貳圓廿五錢　送料拾貳錢

故梁川先生の明文皆此の集中に在り內容の如何は各新聞紙上の高評に依りて明かなり

小川芋錢著

草汁漫畫

定價金六十錢　送料金八錢

古人曰文章拙を以て進み拙を以て成ると芋錢子の畫は則大拙なり其謂ゆる妙想奇致なる者も則拙中の一味に過ぎず識者の士冀くば一本を購ひて書室を飾へ

海老名彈正先生著

三版 **基督教本義**

定價五十五錢　郵税金八錢

本書は基督教會の明星海老名彈正先生卓拔の識勇健の筆を以て上はモーセより下はルーテル、シュライエルマッヘルに到る迄正確に偉人の悟得を明かにし斯教の本義を說明せられたるもの也

大町桂月著

四版 **代表日本人**

定價八拾錢　送料八錢

此書日本國民の特性を發揮せる人を擇びて其面目を描き日本國民の前路に光明を與へ一風變はれる日本國民の歷史也。緑れて道德經也。

伊藤銀月編
机上圖書館第一編

萬國歷史要領

定價卅五錢　郵稅六錢

世界歷史の要領を此一書の中にコンデンスして、一讀東西の進歩變遷を會得せしむ、簡明に適切なること未だ本書の如きものあるを見ざる也試みに一本を購うて此言の當否を見よ。

伊藤銀月編
机上圖書館第二編

萬國地理主點

定價三十五錢　郵稅六錢

本書材料の取捨按排繁簡の適度を得叙述亦簡動適切讀者をして容易に明晰なる地理的觀念を得せしむ獨り國民机上の寶典たるのみならず又愛驗用書として中學生諸君が頭腦の經濟を實益するや疑無し

伊藤銀月編
机上圖書館第三編

科學新潮

定價卅六錢　郵稅六錢

科學の進歩隆盛を極む或は動植物の改造人間の改造をも企圖し魂魄の形狀重量を衡り其他天文物理醫學心理學何れも嶄新なる研究發見を胚胎し本書は平明に是等の新潮を紹介したる机上の珍籍也

伊藤銀月篇
机上圖書館第四編

法制綱要

定價卅五錢　郵稅六錢

法律は國民其大體に通ずるの必要言を俟たず而も術語の難解なる一般の讀者眼に入り難く本書之に鑑み平易なる言文一致體を以て其大綱を擧げ上國家の構成より下私權の得喪に至る迄何人にも容易に會得せしむ蓋に國民机上の寶典也

大町桂月著
十四版

わが筆

定價四十五錢　郵稅金六錢

著者靈活の才筆を以てす家庭學校會社及び文學等に關する卓見到る處に充ち才情掬すべき美文もその間に光彩を放つ天地間有數の活文字也

大町桂月先生選
八版

時代青年文集

定價四十錢　郵稅金六錢

桂月先生最も青年を愛し指導教訓須臾も懈らず爰に滿天下青年諸子の傑作數十篇中より其尤なる者を拔き嚴正なる批評を加へ附錄には當代諸大家の名篇七篇を添へて錦上更に美花を飾る

大町桂月著
六版

家庭と學生

定價參拾八錢　郵稅金六錢

家庭教育の大切なることを今更のやうに感じて愚者の一得もやとの世の青年の男女の前に呈し合して世の父兄の前にも呈する也

大町桂月著
八版

我が文章

定價四十八錢　郵稅金六錢

桂月先生の文章愈老熟して縱橫自在眞情流露し行く處に行き止る處に止まり些の街ふ所なく苦む所なく直ちに人を以て文を遣り洒落飄逸に快闊にして男性的氣魄を發揮し而かも言外に含蓄ある先生の文の如きは當代の逸品也

文學博士桑木嚴翼著　定價一圓廿錢　送料八錢

性格と哲學

本書は高妙なる哲學宗教の問題より卑近處世法並に女子問題を解釋し戲曲文藝等の範圍に亘り懇切なる評釋を下せる學界の珍書也

岩野泡鳴著　定價五拾五錢　郵稅六錢

新自然主義

小原無絃著　定價六十五錢　送料八錢

小說 **天國**

小栗風葉　小川獸水　合著　定價七十錢　送料八錢

小說 **女**

田口掬汀著　定價一圓　郵稅十錢

再版 小說 **追恨**

理學士河野德助著　定價各號圖稅拾二錢

代數學講義

德田秋聲著　定價七十錢　郵稅十錢

母の血

清水橘村著　新体詩集　定價四十錢　送料四錢

筑波紫

牟井桃水著　新刊 小說 **萩の下露**　定價六拾錢　送料八錢

定價拾八錢　郵稅四錢

安全なる結婚

小栗風葉著　四版 小說 **十七八**　定價七十五錢　郵稅十錢

戶張孤雁著　**孤雁挿畫集**　定價五十錢　郵稅八錢

伊藤銀月著　小說 **出潮**　定價六十錢　郵稅十錢

牟井桃水著　小說 **濡衣**　定價六十錢　郵送八錢

大町桂月序　再版 **明治大家文集**　定價八十錢　送料八錢

田口掬汀著　小說 **獨木舟**　定價四十錢　送料六錢

天野誠齋編　**身體健康法**　定價廿五錢　郵稅六錢

牟井桃水著　小說 **子寶**　定價六拾錢　送料八錢

岩野泡鳴著　**闇の盃盤**　定價廿八錢　送料六錢

大町桂月 中内蝶二 合著 七版 **少女と山水** 定價卅五錢 郵稅六錢

大町桂月序 六版 **宇宙と人生** 定價貳拾五錢 郵稅四錢

景山英著 五版 **妾の半生涯** 定價三拾五錢 郵稅六錢

川上眉山著 三版 **觀音岩** 前編 定價八拾錢 郵稅十錢

川上眉山著 再版 **觀音岩** 後 定價八十錢 郵稅十錢

凡島山人著 三版 **馬鹿物語** 定價四十錢 郵稅六錢

田岡嶺雲著 **辟靂鞭** 定價四十五錢 郵稅六錢

田口掬汀著 悲劇 **熱血** 定價三十錢 郵稅六錢

小栗風葉著 小說 **新粧** 定價四十五錢 郵稅六錢

大町桂月 伊藤銀月 監修 三版 **文士寶典** 定價五十錢 郵稅六錢

櫻庭篁村著 小說 **竹影集** 定價六拾五錢 郵稅十錢

伊藤銀月著 社會研究 **高原生活** 定價四十錢 郵稅六錢

久保天隨著 **文壇獅子吼** 定價四十五錢 郵稅六錢

泉鏡花著 再版 小說 **無憂樹** 定價八十五錢 郵稅十錢

久保天隨著 紀行文集 **山水寫生** 定價四十五錢 郵稅六錢

櫻庭篁村著 三版 小說 **不問語** 定價七十五錢 郵稅十錢

（附 大詩人出現 鹽原遊記）

齋木仙醉著 **三位一體論** 定價貳十錢 郵稅四錢

高橋五郎著 **英語實驗百話** 定價參十錢 郵稅六錢

茅原華山著 改册五版 **向上の一路** 定價三十錢 郵稅六錢

大町桂月撰 第貳 **時代青年文集** 定價四十錢 郵稅六錢

海老名彈正著　定價十錢　郵稅二錢
人道

石川三四郎譯　定價三十錢　郵稅四錢
二十世紀の大覺醒

久保天隨著　定價卅五錢郵稅六錢
呼美文韻文
夕紅葉

郷誕堂村著　定價四十五錢　郵稅六錢
紀行文集
天下泰平

徳田秋聲著　定價四十五錢　郵稅六錢
再版小說
花たば

半井桃水著　定價七十五錢　郵稅十錢
再版小說
慰問袋

佐藤得齋著　定價四十錢郵稅六錢
美的衛生

佐木々多門著　定價四十錢　郵稅六錢
新化粧

本居豐穎撰　定價卅五錢　郵稅四錢
紫文摘英

海老名彈正著　定價五十五錢　郵稅六錢
宗教々育觀

茅原華山編　定價三十五錢　郵稅四錢
青年と詩吟

泉鏡花著　定價七十五錢　郵稅十錢
再版小說
誓之卷

日高有倫堂編　定價七十錢　郵稅六錢
基督教講壇集

茅原華山編著　定價貳十錢　郵稅六錢
我と人

泉一路著　定價四拾錢　郵稅六錢

錦木秋子著　定價廿六錢　郵稅四錢
軍國の婦人

苦學社編輯　定價三十錢　郵稅四錢
苦學の伴侶

横山筆助著　定價參十錢　郵稅四錢
三版成功したる催眠暗示術
應用自在

シルレル原著
齊木仙齋譯　定價廿弐錢　郵稅四錢
接神術

黒澤貞二郎編　定價參十錢　郵稅六錢

齋木仙齋譯
耳原トルストイ
教訓小說集
定價參十錢　郵稅四錢

トルストイ原著
加藤直士譯
日露戰爭觀
定價參十錢　郵稅四錢

高橋五郎著
杜伯品藻
定價參十五錢　郵稅六錢

トルストイ伯の主義人物を評す
秋元喜久雄譯
紛紅集
定價卅五錢　郵稅四錢

四柳逸郎
原譯
詩粹
小原無絃譯
定價三十錢　郵稅四錢

原文對照
ベーランスの詩

小原無絃譯
原文對照
シェレーの詩
定價三十五錢　稅四錢

岩野泡鳴著
新體詩集
悲戀悲歌
定價卅五錢　郵稅四錢

岩野泡鳴著
新體詩集
夕潮
定價卅五錢　郵稅六錢

細越夏村著
新體詩集
靈笛
定價三十錢　郵稅四錢

秋元蘆風著
獨詩
野葡萄
定價卅五錢　郵稅六錢

○原文對照○卷末に評註を附す

35
224

35
224

205133-000-5

35-224

現代文士二十八人

中村　武羅夫／著

M42
EDV-0141